

志^し木^き市^し遺跡群

IV

1 9 9 2

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山太藏

文化財は貴重な国民の財産として、尊重し大切に保護していくことが文化財行政の急務であり、国民としての義務ということはマスメディアを通じた近年の盛んな報道により周知のこととされます。しかし、最近の急速な土地開発そしてリゾート開発などにより、年々数多くの埋蔵文化財が破壊されることは大変悲しいことでもあります。

志木市では、特に埋蔵文化財の包蔵地の集中する洪積台地上の志木市本町・柏町・幸町地区が、市街化の最も激しい地域でもあります。本来、これらの貴重な文化財は完全な形で保護・保存していくことが望ましいのですが、教育委員会では各種の開発に伴う埋蔵文化財の保存に関しては、主に発掘調査による記録保存で対処しております。

また、本市では、昭和62年度から国庫及び県費の補助金の交付を受け、個人専用住宅建設者に対する発掘調査費用の負担軽減を図り、同時に埋蔵文化財の保護を理解して頂くために調査を進めております。

平成2年度は、確認調査・発掘調査を併せ、41ヵ所をかぞえ、前年度に比べ約3倍も増加しており、中でも老朽化した個人住宅の建替えが目立ち始めました。さらに、平成4年以降、「新土地保有税」の導入により宅地化すべき農地が激増することを見通しますと、それに伴う発掘調査も増加し、遺跡自体は加速度的に失われていくことは必至であります。そのため、これからは遺跡を後世に残していこうという真の意味での文化財の保護・保存を市民と行政が一体となって考えていく必要があるかと思えます。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、文化庁・埼玉県教育委員会ならびに地元の多くの方々のご指導に深く感謝するとともに、本書が郷土の歴史研究のために広く活用されて頂ければ幸いに存じます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する遺跡群の、平成2年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け、平成2年4月3日より平成3年3月30日まで実施した。
3. 本書の作成は志木市教育委員会が行い、編集は尾形則敏が担当した。また、執筆は下記のように分担した。

第2・4・5章 佐々木保俊 第1・3章 尾形則敏

4. 挿図版の作成は執筆者が行ったが、内野美津江・清水加代・深井恵子の協力を得た。
5. 遺物の実測は、深井恵子・宮本田ず子が行った。
6. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。
 - 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
 - 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。
 - 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
 - 遺構の略記号は、以下のとおりである。
 - J＝縄文時代住居跡 Y＝弥生時代末葉～古墳時代初頭住居跡
 - H＝古墳時代・平安時代住居跡 D＝土坑
 - 遺物挿図版中の網点スクリーンは基本的に赤彩範囲を示すが、土器番号下に黒彩とあるものは、黒色土器の黒彩範囲を示す。

7. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会

担 当 課 社会教育課（平成3年4月の機構改革により社会教育係・文化財保護係に分かれる）

教 育 長 秋山太藏

教育総務部長 星野昭次郎

社会教育課長 白砂正明（～平成3年3月）

〃 並木勝司（平成3年4月～）

社会教育係長 山中政市（～平成3年3月）

社会教育係長 下河辺信行

社会教育係主任 佐藤浩之

文化財保護係長 岡本 孝（平成3年4月～）

文化財保護係主査 佐々木保俊

〃 主事 尾形則敏・今野美香（旧姓前川）

発掘調査担当者 佐々木保俊・尾形則敏

8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局指導部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立埋蔵文化財センター・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校

会田 明・浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・飯田充晴・石井 寛・井上洋一・梅沢太久夫・岡田威夫・岡本東三・織笠 昭・織笠明子・片平雅俊・倉沢和子・栗島義明・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・笹森健一・斯波 治・白石浩之・実川順一・鈴木一郎・鈴木加津子・鈴木正博・鈴木重信・田代 隆・田中英司・田中広明・坪田幹男・中島岐視生・中村倉司・並木 隆・根本 靖・野沢 均・早川 泉・早坂廣人・藤波啓容・松本 完・松本富雄・宮瀧由紀子・柳井章宏・和田晋治・渡辺邦仁

9. 発掘調査及び整理作業参加者

調査補助員（発掘調査及び整理作業）

金野照子・深井恵子

発掘協力員

内野美津江・鹿沼美智子・清水加代・宮本田ず子・村井京子・吉谷顕子

整理協力員

内野美津江・鹿沼美智子・清水加代・宮本田ず子・吉谷顕子

目 次

はじめに

例 言

目 次

図版目次

挿図目次

第1章 平成2年度調査成果の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査成果の概要	3
第2章 城山遺跡第11地点の調査	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 検出された遺構と遺物	8
第3章 中野遺跡第12地点の調査	18
第1節 遺跡の概要	18
第2節 検出された遺構と遺物	19
第3節 まとめ	24
第4章 田子山遺跡第6地点の調査	28
第1節 遺跡の概要	28
第2節 検出された遺構と遺物	29
第5章 田子山遺跡第7地点の調査	33
第1節 遺跡の概要	33
第2節 検出された遺構と遺物	33

図版目次

- 図版 1 城山遺跡第11地点 (上) 調査区近景 (下) 発掘風景
- 図版 2 ♪ (上) 縄文時代 1 号住居跡 (下) 埋葬埋設状態
- 図版 3 ♪ 縄文時代土坑・炉穴 (67・69・71号土坑、1号炉穴)
- 図版 4 ♪ (上) 古墳時代76号住居跡 (下) 76号住居跡遺物出土状態
- 図版 5 ♪ (上) 古墳時代77号住居跡 (下) 古墳時代78号住居跡
- 図版 6 ♪ (上) 66号土坑 (下) 70号土坑
- 図版 7 ♪ 1号住居跡出土遺物、69号土坑出土遺物、71号土坑出土遺物
- 図版 8 ♪ (上) 76号住居跡出土遺物 (下) 78号住居跡出土遺物
- 図版 9 中野遺跡第12地点 (上) 調査区近景 (下) 発掘風景
- 図版10 ♪ (上) 古墳時代 4 号住居跡 (下) カマド遺存状態
- 図版11 ♪ 4号住居跡遺物出土状態
- 図版12 ♪ 4号住居跡出土遺物
- 図版13 田子山遺跡第 6 地点 (上) 調査区近景 (下) 発掘風景
- 図版14 ♪ (上) 平安時代15号住居跡 (下) カマド遺存状態
- 図版15 ♪ (上) 15号住居跡遺物出土状態 (下) 6号土坑
- 図版16 ♪ 15号住居跡出土遺物
- 図版17 田子山遺跡第 7 地点 (上) 調査区近景 (下) 試掘風景
- 図版18 ♪ 調査区全景、平安時代16号住居跡、16号住居跡出土遺物

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と調査地点 (1/20000)	5
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	7
第3図	遺構分布図 (1/300)	8
第4図	1号住居跡 (1/60)	8
第5図	埋甕 (1/30)	9
第6図	1号住居跡出土遺物 1 (1/4)	9
第7図	1号住居跡出土遺物 2 (1/3)	9
第8図	土坑・炉穴 (1/60)	10
第9図	土坑出土遺物 (1/3)	11
第10図	76号住居跡 (1/60)	12
第11図	76号住居跡出土遺物 (1/4)	12
第12図	77号住居跡 (1/60)	13
第13図	78号住居跡 (1/60)	14
第14図	78号住居跡出土遺物 (1/3)	14
第15図	79号住居跡 (1/60)	15
第16図	70号土坑 (1/60)	16
第17図	11号井戸跡 (1/60)	17
第18図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	18
第19図	遺構分布図 (1/300)	19
第20図	4号住居跡 (1/60)	20
第21図	4号住居跡出土遺物 1 (1/4)	22
第22図	4号住居跡出土遺物 2 (1/4)	23
第23図	住居構造の対比 (1/120)	25
第24図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	28
第25図	遺構分布図 (1/300)	29
第26図	15号住居跡 (1/60)	30
第27図	15号住居跡出土遺物 1 (1/4)	31
第28図	15号住居跡出土遺物 2 (1/3)	32
第29図	6号土坑 (1/60)	32
第30図	遺構分布図 (1/300)	33
第31図	16号住居跡 (1/60)	34
第32図	16号住居跡出土遺物 1 (1/4)	34
第33図	16号住居跡出土遺物 2 (1/3)	34

第1章 平成2年度調査成果の概要

第1節 調査に至る経過

志木市は、埼玉県の南東部に位置し、市域は南北4.2km、東西4.4km、面積9.02km²を測る。地理的景観を見ると、まず河川は荒川（旧入間川）が市域東部を南東流し、柳瀬川が市域北西部から中央部にかけて北東流する。柳瀬川はその後、市域のほぼ中央部で南東流する新河岸川に合流し、吸収される。

地形は大まかに、新河岸川を境に東部が荒川の形成した沖積低地、西部が古多摩川によって形成された武蔵野台地、さらに北西部は武蔵野台地を開析して流れる柳瀬川の低地とに分かれ、市域の約80%は低地によって占められている。こうした自然環境の下、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、武蔵野台地の縁辺部に帯状に存在している。

当市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木駅一池袋駅間を急行で約18分というように交通の便にも恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして、昭和40年前後から急激に人口増加の傾向をみせてきた。また、最近では営団有楽町線乗り入れが開始し、この傾向がますます顕著になってきている。

番号	調査地点	所在地	面積(m ²)	調査期間
1	城山遺跡第11地点	志木市柏町3丁目1137-2	192.00	平成2年4月6日～20日
2	城山遺跡第12地点	柏町3丁目2603-1	1074.00	4月25日
3	中野遺跡第11地点	柏町3丁目2591,2592-1	17.00	4月26日
4	城山遺跡第13地点	柏町3丁目1137-2	192.00	4月7日
5	中野遺跡第12地点	柏町1丁目1496-8	138.39	5月9日～6月1日
6	本町4丁目	本町4丁目1111-1	484.18	5月16日
		本町4丁目1111-14	270.18	
		本町4丁目1111-13,14	243.63	
7	中野遺跡第13地点	柏町1丁目1479-16	122.87	5月18日
8	中野遺跡第14地点	柏町1丁目1479-17	215.62	5月18日
9	中野遺跡第15地点	柏町1丁目1479-13	100.00	5月18日
10	西原大塚遺跡第14地点	幸町4丁目3113-3	129.00	5月26日
11	本町4丁目	本町4丁目1124-22	70.99	6月1日
12	田子山遺跡第6地点	本町3丁目1816-2	170.60	6月7日～30日
13	西原大塚遺跡第15地点	幸町4丁目3405-3	495.65	6月14日

(第1図の番号と一致)

番号	調査地点	所在地	面積(㎡)	調査期間
14	中道遺跡第15地点	志木市柏町4丁目2672-7	125.99	平成2年6月19日
15	市場遺跡第4地点	本町1丁目1561-1	310.13	6月20日
15	本町4丁目	本町4丁目1126-8	205.86	6月21日
17	市場裏遺跡第1地点	本町1丁目2510-1,3	250.44	7月6日
18	田子山遺跡第7地点	本町3丁目1812-5	167.57	7月17日~20日
19	西原大塚遺跡第16地点	幸町4丁目3415-15	99.06	7月17日
20	中道遺跡第16地点	柏町4丁目2908-9	141.22	7月24日
21	本町4丁目	本町4丁目1107-33,39	334.23	7月25日
22	中道遺跡第17地点	柏町4丁目2671-17,22	104.11	7月26日
23	中道遺跡第18地点	柏町4丁目2908-2	141.22	8月4日
24	田子山遺跡第8地点	本町2丁目1733-25	42.80	8月4日
25	田子山遺跡第9地点	本町2丁目1691-14	102.36	8月21日
26	中野遺跡第16地点	柏町1丁目1517-5	191.74	8月27日
		柏町1丁目1517-6	99.18	
		柏町1丁目1517-1	141.22	
		柏町1丁目1517-7	115.15	
27	西原大塚遺跡第17地点	幸町3丁目3108,3109-1,2	240.04	10月2日
28	中道遺跡第19地点	柏町5丁目2884-19	197.64	10月3日
29	田子山遺跡第10地点	本町2丁目1712-1	313.83	10月18日
30	新邸遺跡第4地点	柏町5丁目2931-1,4	681.46	10月17日
31	西原大塚遺跡第18地点	幸町4丁目3473-1	74.52	10月17日
32	中野遺跡第17地点	柏町1丁目1488-21	118.84	10月18日
33	田子山遺跡第11地点	本町2丁目1715-3,4	394.52	10月26日
34	中道遺跡第20地点	柏町5丁目2909-1	1199.66	11月16日
35	本町4丁目	本町4丁目1949-12,13	59.89	11月26日
36	田子山遺跡第12地点	本町2丁目1709	676.58	12月6日
37	市場遺跡第5地点	本町2丁目1624-1,1625-5	676.58	12月6日
38	中道遺跡第21地点	柏町5丁目2951-2	487.00	1月21日
39	中道遺跡第22地点	柏町5丁目2908-1	125.00	1月22日
40	田子山遺跡第13地点	本町2丁目1701	189.00	2月13日
41	中道遺跡第23地点	柏町5丁目2922-11,12	81.24	3月28日
合 計			11670.27	

(第1図の番号と一致)

これに伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く、小規模開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する志木市本町・柏町・幸町地区は市街化の最も激しい地域になっている現状も遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を行っていく上で、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっているが、これに対しては主に記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

さて、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いが、その中で開発当事者が個人で、その個人が専用使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など困難な点が多かった。また、最近、人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、これについても対処していく必要もでてきている。そのため、昭和62年度からは国・県よりの補助金の交付を受け、これに対応していくことにした。

平成2年度は確認調査・現地踏査を含めて、41地点（ただし、開発別件数は46件）の調査を実施し、前年度に比べて、件数は約3倍、面積は約1.5倍に急増した。この理由は、平成元年度に埋蔵文化財包蔵地の見直しを行い、調査対象を遺跡内のみから新たに遺跡の発見される可能性が高い区域を加味した結果と考えられる。

なお、工事内容の内訳件数は、個人専用住宅建設21件、共同住宅建設17件、社員寮建設3件、道路改良工事1件、児童公園造成1件、自家用倉庫建設1件、稲荷神社引屋1件、学校校舎建設1件である。

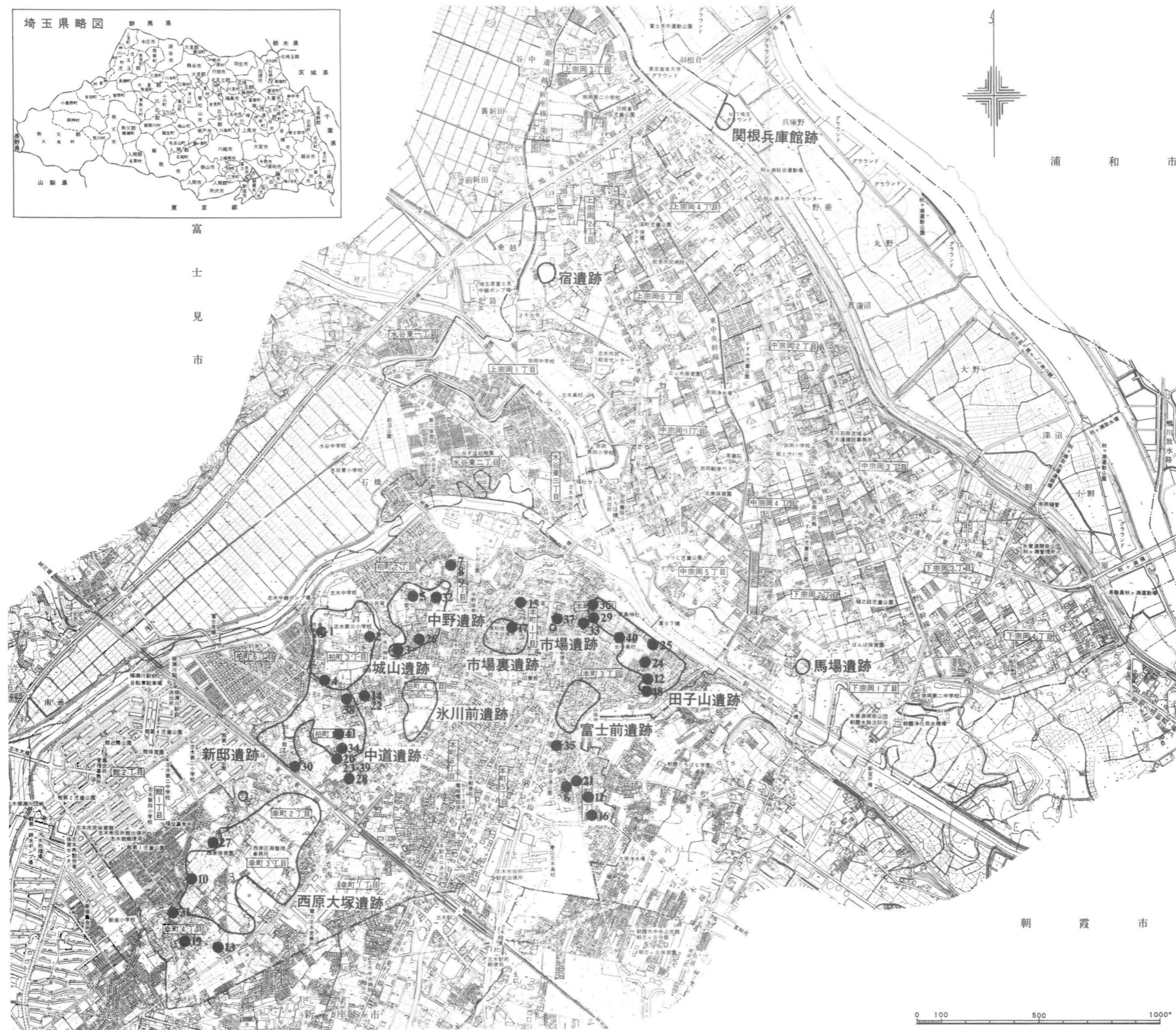
第2節 調査成果の概要

1. 城山遺跡第11地点 後述。委保第5の1714、平成2年10月22日付。
2. 城山遺跡第12地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
3. 中野遺跡第11地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
4. 城山遺跡第13地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
5. 中野遺跡第12地点 後述。委保第5の2731、平成2年10月22日付。
6. 本町4丁目1111-1・14、1113-13・14 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
7. 中野遺跡第13地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
8. 中野遺跡第14地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
9. 中野遺跡第15地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
10. 西原大塚遺跡第14地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
11. 本町4丁目1124-22 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
12. 田子山遺跡第6地点 後述。委保第5の3325、平成2年10月22日付。
13. 西原大塚遺跡第15地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
14. 中道遺跡第15地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。

15. 市場遺跡第4地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
16. 本町4丁目1126-8 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
17. 市場裏遺跡第1地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
18. 田子山遺跡第7地点 後述。委保第5の4645、平成2年10月22日付。
19. 西原大塚遺跡第16地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
20. 中道遺跡第16地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
21. 本町4丁目1107-33・39 現地踏査。遺構・遺物は検出されなかった。
22. 中道遺跡第17地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
23. 中道遺跡第18地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
24. 田子山遺跡第8地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
25. 田子山遺跡第9地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
26. 中野遺跡第16地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
27. 西原大塚遺跡第17地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
28. 中道遺跡第19地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
29. 田子山遺跡第10地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
30. 新邸遺跡第4地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
31. 西原大塚遺跡第18地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
32. 中野遺跡第17地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
33. 田子山遺跡第11地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
34. 中道遺跡第20地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
35. 本町4丁目1949-12・13 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
36. 田子山遺跡第12地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
37. 市場遺跡第5地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
38. 中道遺跡第21地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
39. 中道遺跡第22地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。
40. 田子山遺跡第13地点 確認調査。発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
41. 中道遺跡第23地点 確認調査。遺構・遺物は検出されなかった。



富
士
見
市



朝霞市

第1図 市域の地形と調査地点 (1/20000)

第2章 城山遺跡第11地点の調査

第1節 遺跡の概要

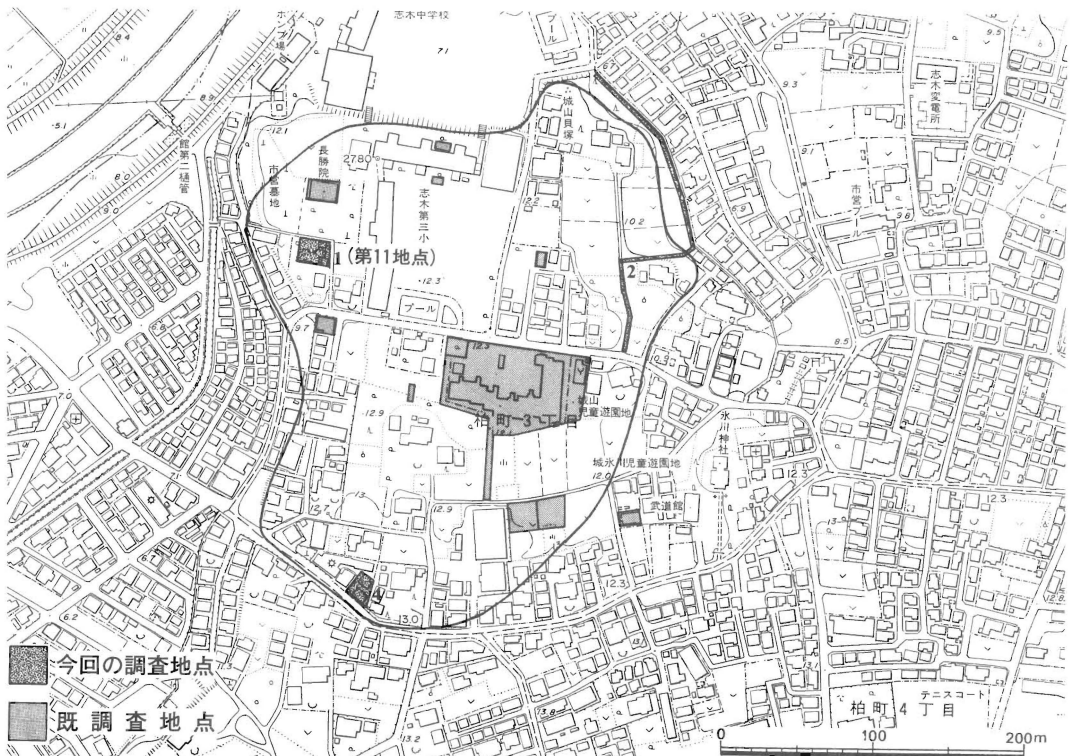
(1) 立地と環境

城山遺跡は、北西に北東流する柳瀬川を臨む台地縁辺部に位置する。遺跡の北東には、柳瀬川に直交するように浅い谷が入り込んでおり、遺跡のある部分は小規模な舌状台地となっている。遺跡の標高は約12m、低地との比高差約5mを測る。遺跡の現況は畑地を僅かに残すのみで、大部分が宅地となっている。

本遺跡は、これまでの発掘調査により、縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、平安時代の集落跡、中世の城館跡であることが判明している（志木市史編さん室 1984・1986、佐々木 1987、佐々木・尾形 1988、尾形 1989・1991a・b）。

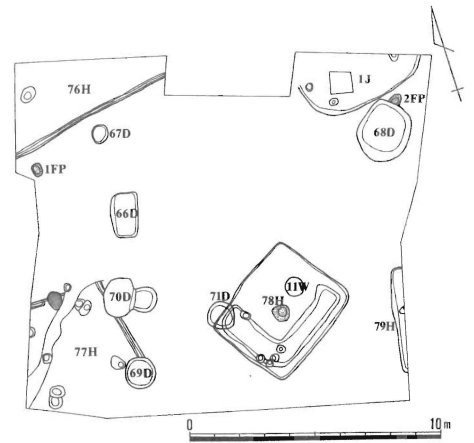
(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成2年4月6日から開始した。排土置き場が確保できなかったため、表土を反転して調査を行うこととし、まず北半の表土剥ぎをバックホーを使用して行った。翌日からは遺構確認作業を実施、住居跡2軒・土坑3基・炉穴2基を検出、9日からはそれぞれの遺構の精査に入っ



第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

た。その結果、住居跡は縄文・古墳時代、土坑・炉穴は縄文・歴史時代のものと判明、10日からは写真撮影・図面の作成を始め、12日には北半の調査を終えた。13日からは北半の埋め戻しと南半の表土剥ぎを開始した。16日には遺構確認作業に入り、住居跡3軒・土坑3基・井戸跡1基を検出し、順次精査を行った結果、住居跡は古墳・歴史時代、土坑は縄文・歴史時代、井戸跡は歴史時代のものと判明した。19日からは写真撮影・図面作成にかかり、20日には重機による埋め戻しを行い、調査を完了した。



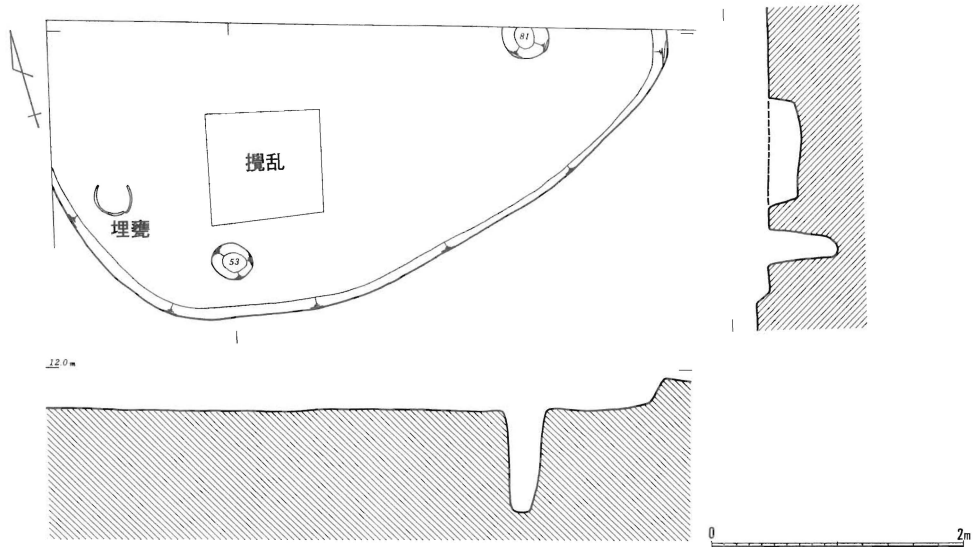
第3図 遺構分布図 (1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代

1号住居跡 (第4図)

〔住居構造〕北半は調査区外にある。(平面形)楕円形? (規模)不明×5m以上。(壁高)20cm前後を測り、比較的ゆるやかに立ち上がる。(床面)軟弱であり、硬化部分を僅かに残すのみである。(炉跡)調査区外に位置するものと思われる。(柱穴)2本検出された。(埋甕)西壁下、南に寄って位置する。径40cm、深さ15cmの大略円形を呈する掘り込みをもち、頸部以下を切り取った土器を埋設している。覆土はローム粒子を多量に含んだ暗茶褐色土で、包含されるものはなかった。



第4図 1号住居跡 (1/60)

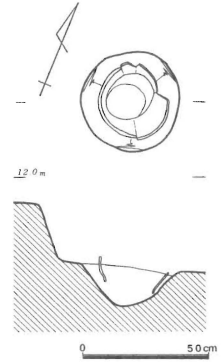
(覆土) ローム粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中から僅かに出土した。すべて破片である。

[時期] 加曽利EⅡ式期。

1号住居跡出土遺物 (第6・7図)

1は埋甕として使用された連弧文系の土器。口縁部に2本、頸部のくびれ部に3本の沈線を巡らせ文様帯を形成する。3本の沈線により9単位の連弧文が施され、弧線の波底部からはそれぞれ3本の沈線が垂下する。また、弧線の連結部の一ヵ所は弧線同士が直接接するのではなく、口縁部と平行する1本の沈線によってなされており、その下に渦巻文が施される。地文はLRの単節斜縄文である。



第5図 埋甕 (1/30)

2は複合口縁の土器。口縁部は強く内湾する。複合部は6条1単位の櫛状施文具による条線で鋸歯状文を施し、上下を横位の条線で区画する。胴部は斜位の条線が施される。

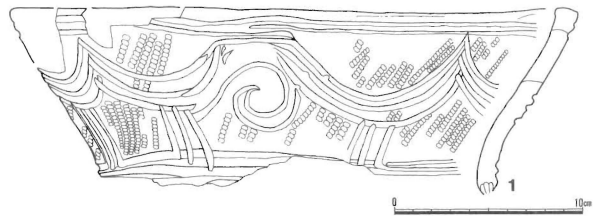
3は口縁部に結節沈線文を巡らせ、以下は結節沈線文による波状文が施される。胎土には雲母が含まれる。

4は口唇部直下に刺突文が施される。

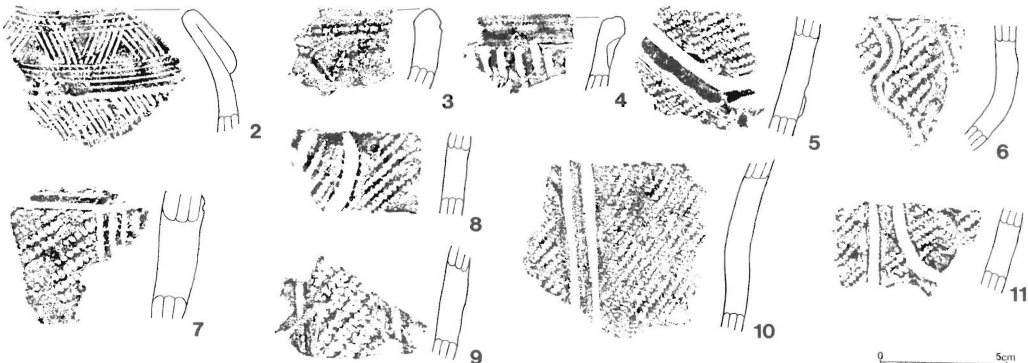
5~11は胴部破片。5はLRの斜縄文を地文とし、隆帯が曲線的に貼付される。内面にはタール状の物質が付着する。6はLRの斜縄文を地文とし、半截竹管による蛇行する懸垂文が施される。

7はLRの斜縄文を地文とし、半截竹管により横位に平行沈線を巡らせ、2条の平行沈線が垂下する。8はLRの斜縄文を地文とし、おそらく逆「U」字状の文様が描かれようか。

9はLRの斜縄文を地文とし、沈線の懸垂文間は磨消されるものと思われる。10はRLの斜縄文を地文とし、平行沈線が垂下する。11はLRの斜縄文を地文とし、沈線により文様が描かれる。



第6図 1号住居跡出土遺物1 (1/4)



第7図 1号住居跡出土遺物2 (1/3)

67号土坑（第8図）

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）80×60cm。（深さ）10cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は40度前後で立ち上がる。（覆土）ローム粒子を多く含む暗褐色土で、よく締まっている。

〔遺物〕中期の土器片が出土したが、いずれも小片であった。

〔時期〕出土遺物から中期のものと思われる。

69号土坑（第8図）

〔構造〕77号住居跡に切られる。（平面形）略円形。（規模）135×125cm。（深さ）40cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は70度前後で立ち上がる。（覆土）焼土粒子を僅かに含む黒褐色土。

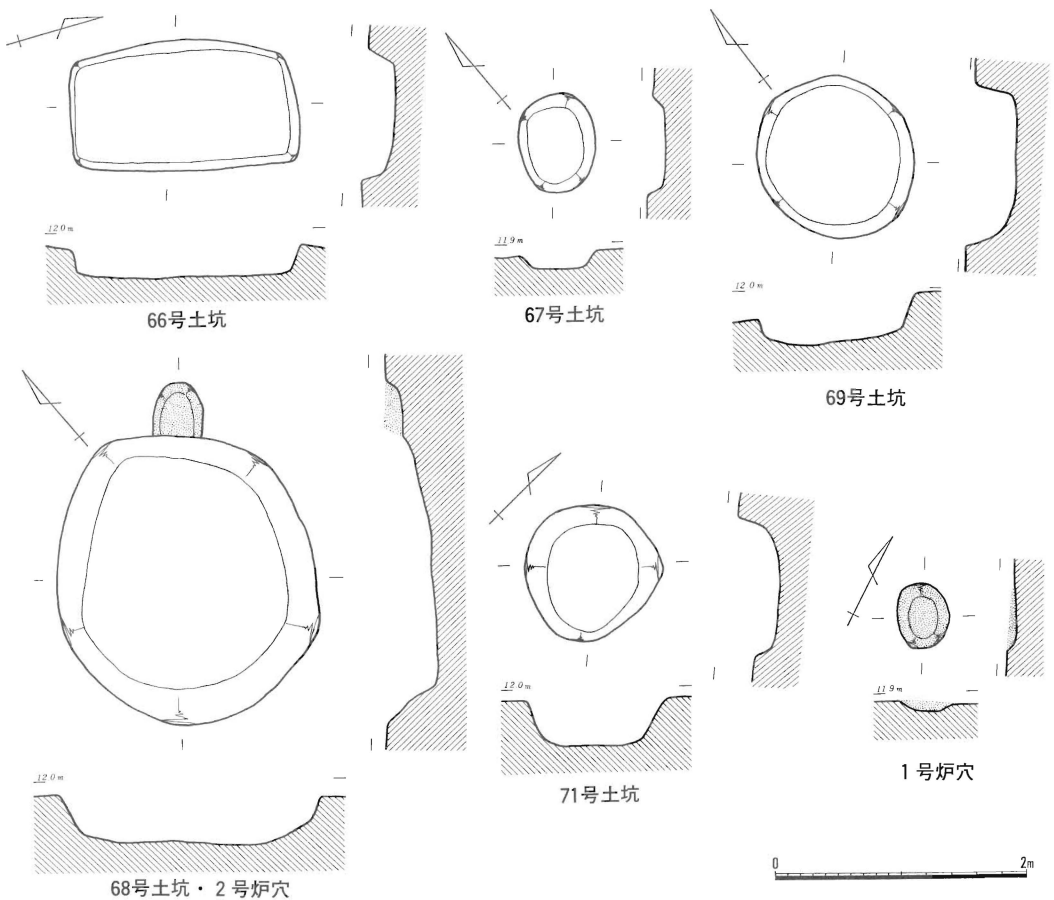
〔遺物〕縄文時代の土器片と、拳大の礫が出土。

〔時期〕中期後半の可能性が強い。

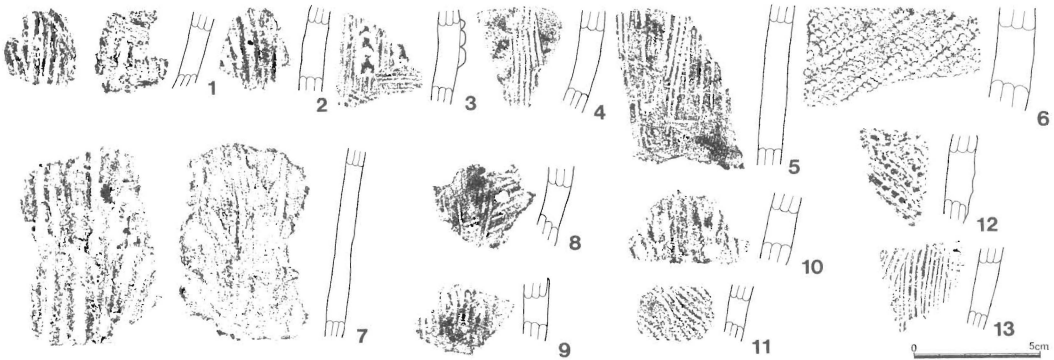
69号土坑出土遺物（第9図1～6）

1・2は条痕文系の土器。1は内面にも施される。共に胎土には繊維が含まれる。

3・4は竹管文系の土器。3は集合沈線を地文とし、半截竹管の刺突が加わった貼付文がつけら



第8図 土坑・炉穴（1/60）



第9図 土坑出土遺物 (1/3)

れる。4は集合沈線が施される。

5・6は中期後半の土器。5は底部に近い破片で、条線が施される。6はLRの斜縄文が施される。

71号土坑 (第8図)

〔構造〕78号住居跡に切られる。(平面形)不整円形。(規模)110×105cm。(深さ)45cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は60度前後で立ち上がる。(覆土)上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く含む暗黄褐色土。

〔遺物〕縄文時代の土器片が出土。

〔時期〕前期後半か。

71号土坑出土遺物 (第9図7~13)

7~10は条痕文系の土器。7は内面に擦痕が認められる。いずれも胎土には繊維が含まれる。

11~13は竹管文系の土器。11はRLの斜縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線が曲線的に施される。12は半截竹管の押し引きによる連続爪形文が浮線状に施される。胎土には雲母が含まれる。13は集合沈線が施される。

1号炉穴 (第8図)

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)50×40cm。(深さ)10cm前後を測る。断面は皿状を呈し、坑底は焼けていた。(覆土)焼土粒子・ローム粒子を多く含む明茶褐色土。

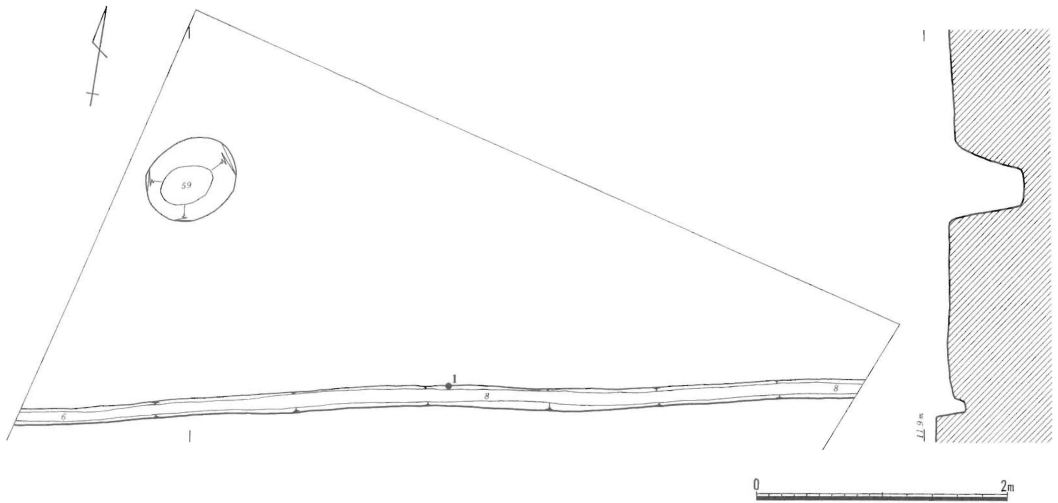
〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕不明。

(2) 古墳時代

76号住居跡 (第10図)

〔住居構造〕住居北側の大部分が調査区外にあり、詳細は不明。(壁高)15cm前後を測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)幅14cm、深さ8cm前後を測る。(床面)全体的に軟弱で、硬化部分を一部に



第10図 76号住居跡 (1/60)

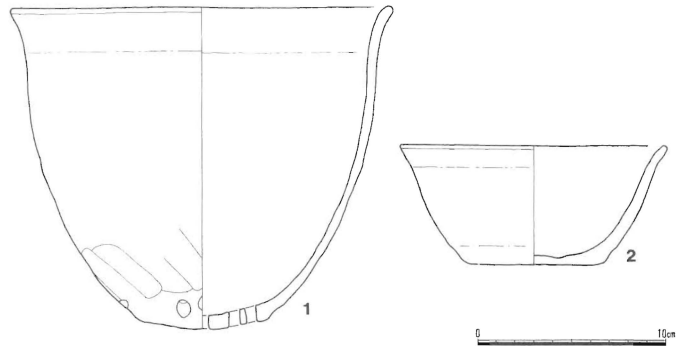
残すのみである。(カマド) 調査区外にあるものと思われる。(覆土) ローム粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 床面上・覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 鬼高式期。

76号住居跡出土遺物 (第11図)

1は多孔式の土師器甕形土器。頸部は弱くくびれ、口縁部は僅かに外反する。胴部はゆるやかにすぼまり、丸底状の底部に至る。底部には丸棒状の工具で17の孔が穿たれている。口縁部内外面横ナデ、他はナデられる。1/3程の遺存度で、南壁下中央部の床面上の出土である。



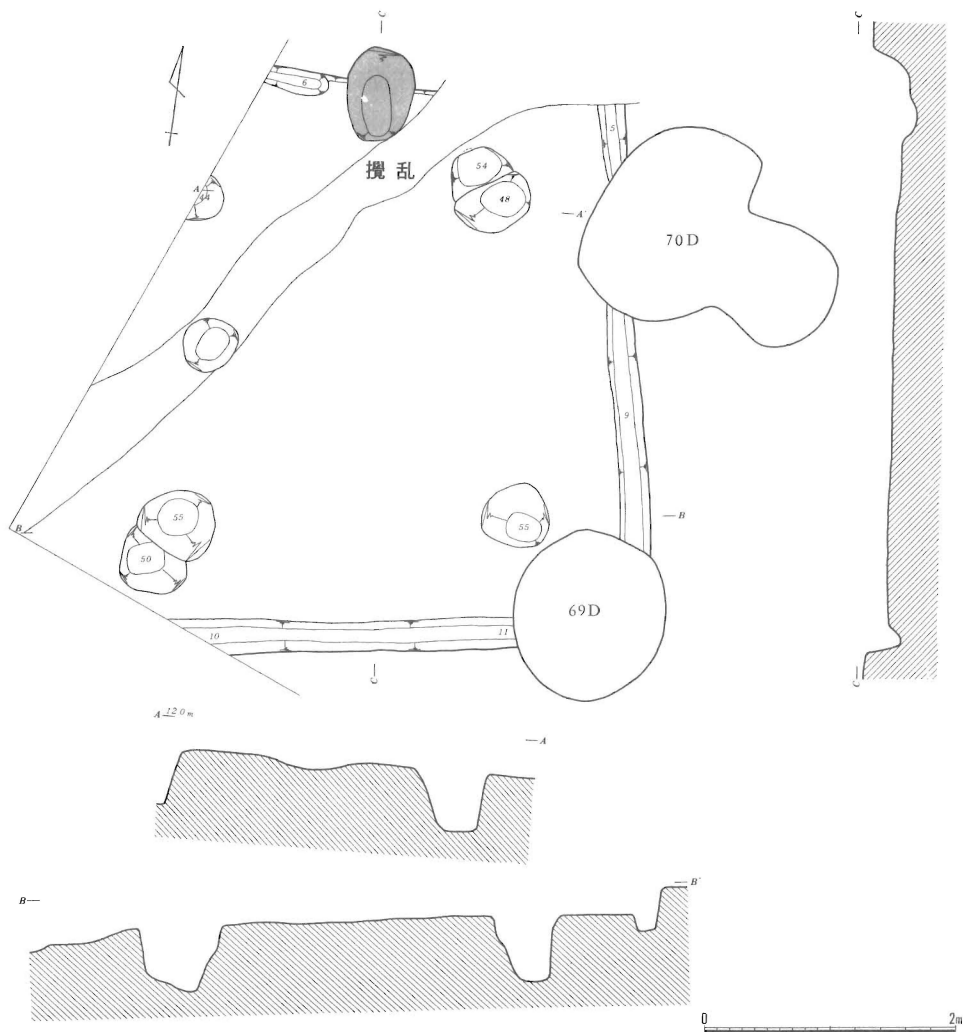
第11図 76号住居跡出土遺物 (1/4)

2は土師器环形土器。平底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口縁部内外面横ナデ、他はナデられる。1/4程の遺存度で、覆土中の出土である。

〔住居構造〕 住居西側は調査区外にある。69号土坑を切り、70号土坑に切られる。(平面形) 正方形になるものと思われる。(規模) 不明×4.6 m。(壁高) 25cm前後を測り、急斜に立ち上がる。

77号住居跡 (第12図)

〔住居構造〕 住居西側は調査区外にある。69号土坑を切り、70号土坑に切られる。(平面形) 正方形になるものと思われる。(規模) 不明×4.6 m。(壁高) 25cm前後を測り、急斜に立ち上がる。



第12図 77号住居跡 (1/60)

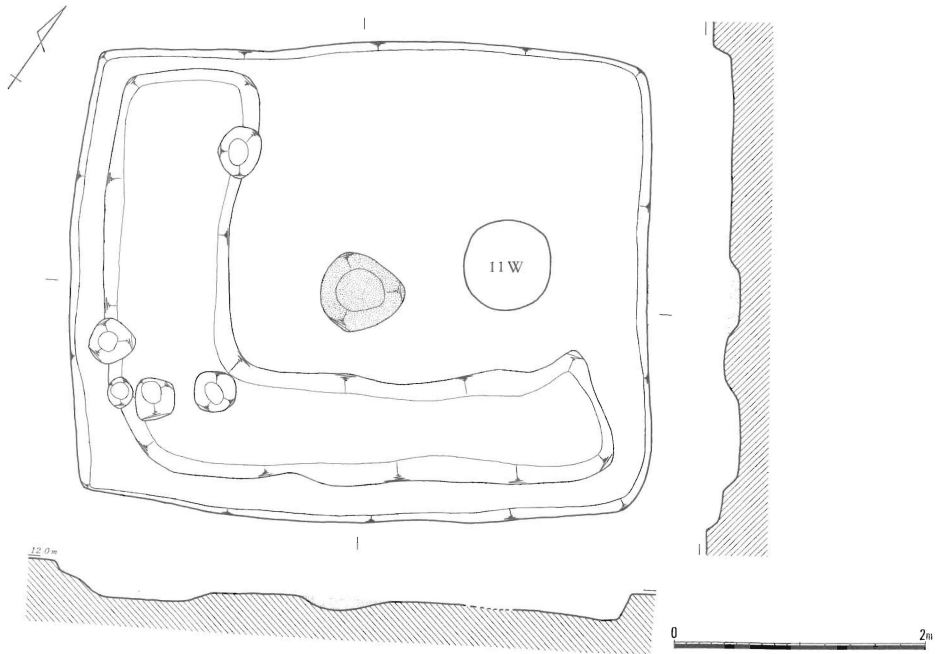
(壁溝) 北壁の東側を除き巡るものと思われる。幅20cm、深さ5～11cmを測る。(床面) 壁際を除き、よく踏み固められている。(カマド) 北壁中央からやや右側に偏って位置する。壁への掘り込み30cmを測る。天井部・袖部は灰白色粘土で構築されていたようだが、攪乱により大部分が破壊されているため、詳細は不明である。(柱穴) コーナー部の4本が支柱穴となろう。深度記入のないピットは後世のものである。(覆土) 焼土粒子・炭化物粒子を多く含み、ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。焼土がまとまって堆積している部分も認められる。

[遺物] 床面上・覆土中から僅かに出土。図化できるものはなかった。

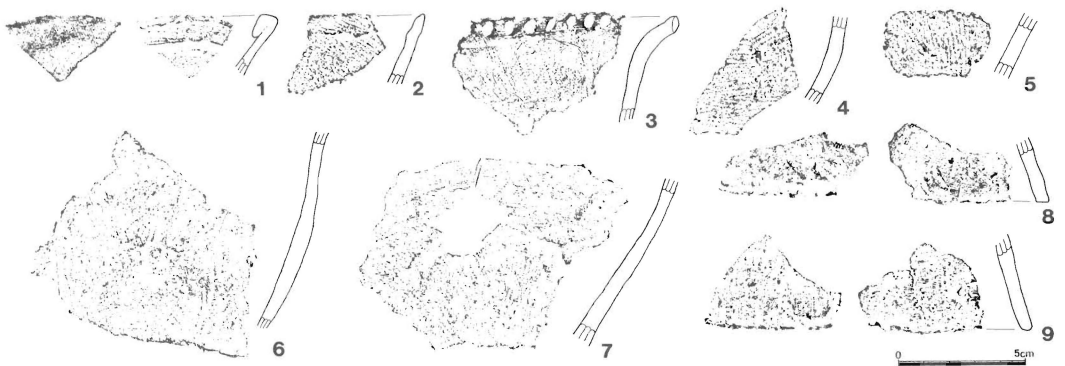
[時期] 鬼高式期。

78号住居跡（第13図）

〔住居構造〕 71号土坑を切り、11号井戸跡に切られる。（平面形）長方形。（規模）4.6×3.85m。
 （壁高）15cm前後を測り、ゆるやかに立ち上がる。（床面）全体に軟弱で、僅かに硬化部分が見られる。住居西側から南側にみられる溝状の掘り込みは掘り方であるが、その上を貼り床している形跡はなかった。（炉跡）住居ほぼ中央に位置する。65×60cm、深さ10cmの地床炉である。（柱穴）住居に伴う柱穴は検出されなかった。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。
 〔遺物〕 床面上・覆土中から僅かに出土した。
 〔時期〕 五領式期。



第13図 78号住居跡 (1/60)



第14図 78号住居跡出土遺物 (1/3)

78号住居跡出土遺物（第14図）

1は壺形土器。口縁部は内側へ折り返される。外面は磨かれ赤彩される。内面にはハケ目痕を残す。

2・3は甕形土器の口縁部破片。2は外面にハケ目痕を残す。3は口唇部に刻みが施される。

4～7は甕形土器の胴部破片。4・5・7の外面にはハケ目痕を残す。6の外面はナデられる。4・6は外面に煤が付着する。

8・9は台付甕形土器の脚台部破片。内外面にハケ目痕を残す。

（3）平安時代

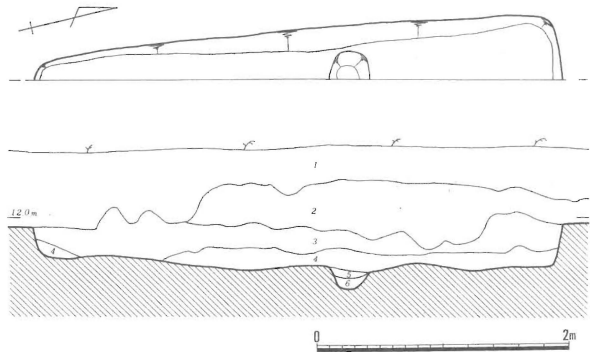
79号住居跡（第15図）

〔住居構造〕大部分が調査区外にあり、西壁際の調査のみで詳細は不明である。

（規模）不明×4.2m。（壁高）35cm前後を測り、急斜に立ち上がる。（柱穴）西壁下にピットが1本検出されたが、位置的には支柱穴とは考えられない。（覆土）1層—耕作土、2層—黒色土、3層—黒褐色土（ローム粒子・焼土粒子を含む。部分的に焼土がブロック状に含まれる）、4層—暗褐色土（ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む）、5層—暗赤褐色土（焼土粒子を多く含む）、6層—暗茶褐色土（ローム粒子を多く含む）。

〔遺物〕覆土中から僅かに土器片が出土したが、図化できるものはなかった。

〔時期〕国分式期。



第15図 79号住居跡（1/60）

2号炉穴（第8図）

〔構造〕68号土坑に切られる。（平面形）楕円形になるものと思われる。（規模）不明×40cm。

（深さ）15cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は45度前後で立ち上がる。（焼土の状態）坑底から壁全体が焼けた痕跡を残すが、赤化するほどではない。（覆土）焼土粒子を多く含む黒褐色土の単一土層である。

〔遺物〕須恵器環形土器・土師器甕形土器の破片が出土した。

〔時期〕国分式期。

〔所見〕土器焼成土坑の可能性をもつが、確証はない。

（4）中・近世

66号土坑（第8図）

〔構造〕（平面形）長方形。（規模）180×105cm。（深さ）25cm前後を測る。坑底は平坦で、壁

は60度前後で立ち上がる。(覆土) ロームブロックを含む暗褐色土の単一土層である。全体的にボンボンした感じで、締まりがない。

〔遺物〕 縄文時代・古墳時代の土器片の出土があるが、流れ込んだものであろう。

〔時期〕 覆土の状態から中世以降のものと考えられる。

68号土坑 (第8図)

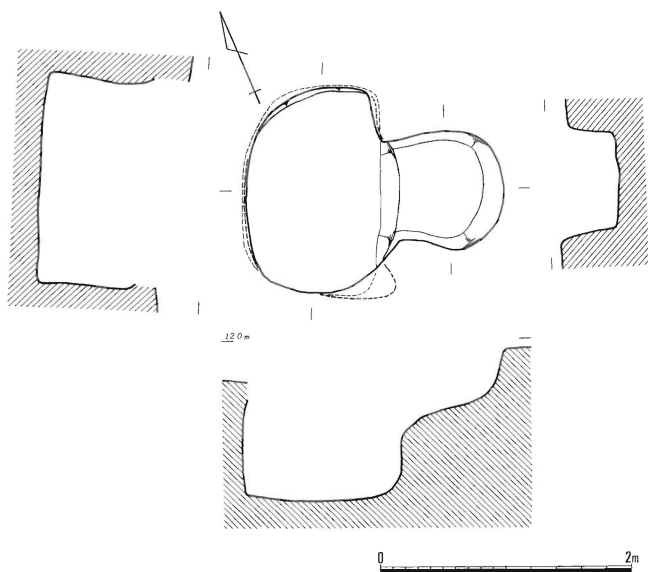
〔構造〕 2号炉穴を切る。(平面形) 隅の丸い五角形状を呈する。(規模) 230×205 cm。(深さ) 35cm前後を測る。坑底は凹凸がめだち、壁は50度前後で立ち上がる。(覆土) ロームブロックを多く含む暗褐色土で、ボンボンして締まりがない。特に最下層はロームブロックの間に暗褐色土が充填されている状態である。

〔遺物〕 縄文時代・古墳時代の土器片の出土はあるが、流れ込んだものであろう。

〔時期〕 覆土の状態から中世以降のものと考えられる。

70号土坑 (第16図)

〔構造〕 地下式壙である。77号住居跡を切る。(入口竪坑部) 開口部は90×80cmの隅丸方形を呈し、深さ45cm前後を測る。坑底は主体部にむけて傾斜しており、75×65cmの長方形を呈する。主体部への連絡は70cmの段差をもつ。(主体部) 平面形は170×125 cmのほぼ長方形を呈し、主軸に対して横長の形態をとる。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりも垂直に近い。天井部は崩落していたが、高さ75cm前後であったと思われる。(覆土) 竪坑部はローム粒子・ロームブロックを多く含む暗褐色土でボンボンした感じである。主体部は主に崩落した天井部のロームブロックからなる。



第16図 70号土坑 (1/60)

〔遺物〕 縄文時代・古墳時代の土器片の出土があるが、流れ込んだものであろう。

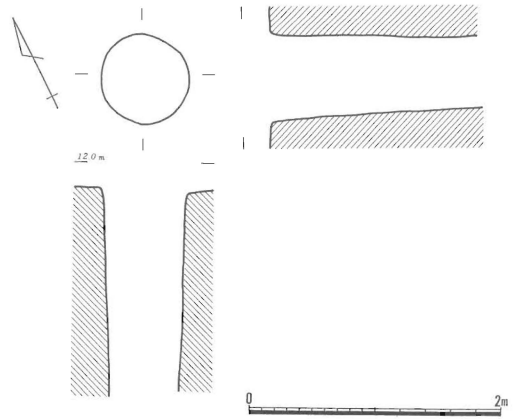
〔時期〕 中世。

11号井戸跡（第17図）

〔構造〕 78号住居跡を切る。平面形は径70cmの概略円形を呈する。壁はほぼ垂直に垂下する。規模が小さく作業が困難なことから、危険防止のため170cmの深度で調査を断念した。覆土は礫を多く含む暗褐色土である。

〔遺物〕 大部分が縄文時代の土器片で、流れ込んだものであろう。

〔時期〕 中世以降。



第17図 11号井戸跡（1/60）

〔引用・参考文献〕

志木市史編さん室 1984『志木市史 原始・古代資料編』

1986『志木市史 中世資料編』

佐々木保俊 1987『城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書』志木市の文化財第11集

佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集

尾形則敏 1989「城山遺跡第4地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集

1991 a 「城山遺跡第6地点の調査」『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第15集

1991 b 「城山遺跡第7・9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集

第3章 中野遺跡第12地点の調査

第1節 遺跡の概要

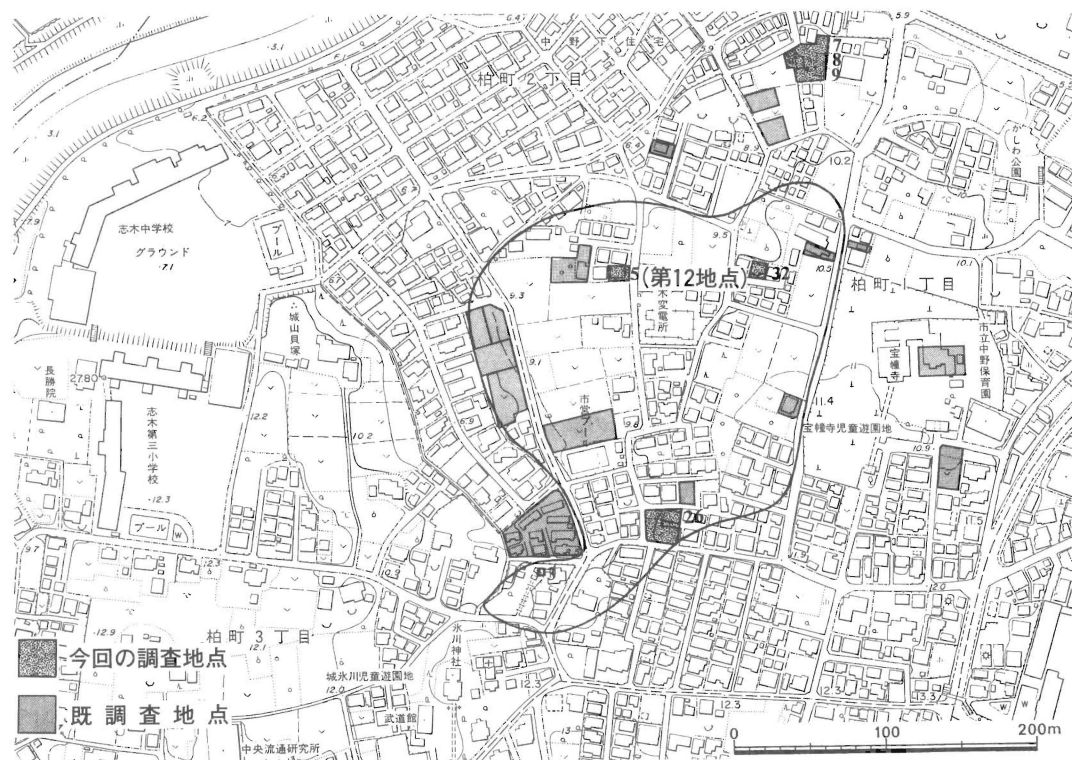
(1) 立地と環境

中野遺跡は、志木市柏町1丁目を中心とする遺跡である。遺跡は柳瀬川を北西に臨む台地上にあり、標高は南端の高い位置で約11m、北端の低い位置で約9mを測り、北側ではそのまま際立った断崖もみられないまま、ゆるやかに標高6mの低地に移行する。また、西方にはほぼ南北方向に小支谷が細長く入り込んでおり、その対岸には城山遺跡が立地している。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和60年に志木市遺跡調査会によって実施され、以後の調査で弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の集落跡であることが知られている。なお、平成2年度の志木市遺跡調査会の調査では、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡3軒が検出されている(佐々木・尾形 1985・1989・1990)。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成2年5月9日から開始した。調査区の長軸に合わせ、ほぼ東西方向に2本のトレンチを設定、バックホーを使用し、表土を剥ぎながら遺構確認作業を行った結果、調査区西側ほ

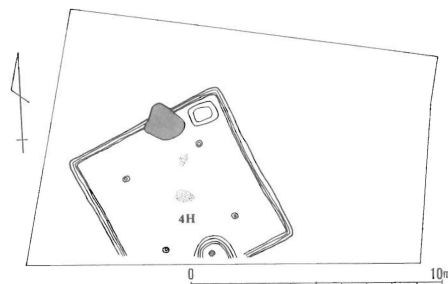


第18図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

ば全面にカマドをもつ住居跡を1軒検出した。そのため、残土置場を調査区内に確保することが困難であると判断し、12日には残土をバックホーでダンプ（2t）に積載し、調査区外に運搬した。

これにより、その後の遺構精査時にでる排土を調査区内に置くことが可能になり、22日からは遺構の精査を開始、遺構は古墳時代後期の住居跡であることが判明した。

29日には遺構の写真撮影を行い、30日までは遺構の実測を終了、6月1日には埋め戻しを行い、調査を完了した。



第19図 遺構分布図 (1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

4号住居跡 (第20図)

〔住居構造〕南西コーナーは調査区外にある。(平面形)正方形。(規模)6.66×6.50m。(壁高)60~65cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)確認できる範囲では、上幅10~15cm・下幅6~10cm・深さ10~20cmを測り、カマド部分を除いて全周する。(床面)壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められている。また、カマド前面と住居中央の2ヵ所に火を受けた形跡のある部分が認められた。(カマド)北壁中央からやや東に偏って位置し、方位はN-22°-W。長さ150cm・幅130cm・壁への掘り込み40cmを測り、両袖部はロームを馬蹄形状に隆起させ残し、その上部・天井部に灰褐色粘土を被覆させ構築している。馬蹄形状のロームは高さ20cm・幅15cmを測る。(柱穴)各コーナーの4本が支柱穴である。一辺25cm前後の隅丸方形で、深さは51~60cmを測る。(貯蔵穴)カマド右横の北東コーナーに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は110×74cm・深さ59cmを測る。

〔凸堤〕南壁ほぼ中央に付設される環状の隆起帯で、高さ6cm・幅30cm前後を測る。凸堤の内側には深さ24cmの小ピットをもつ。(覆土)1層-ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む黒褐色土、2層-ローム粒子を多く含む暗褐色土、3層-ロームブロックを多く含む暗黄褐色土、4層-ロームブロックを含む暗褐色土、5層-ロームブロックを含む黒色土、6層-ローム粒子を多く含む暗茶褐色土、7層-ローム粒子を多く含む暗褐色土。

〔遺物〕貯蔵穴中及びその付近から土器が多く出土した。

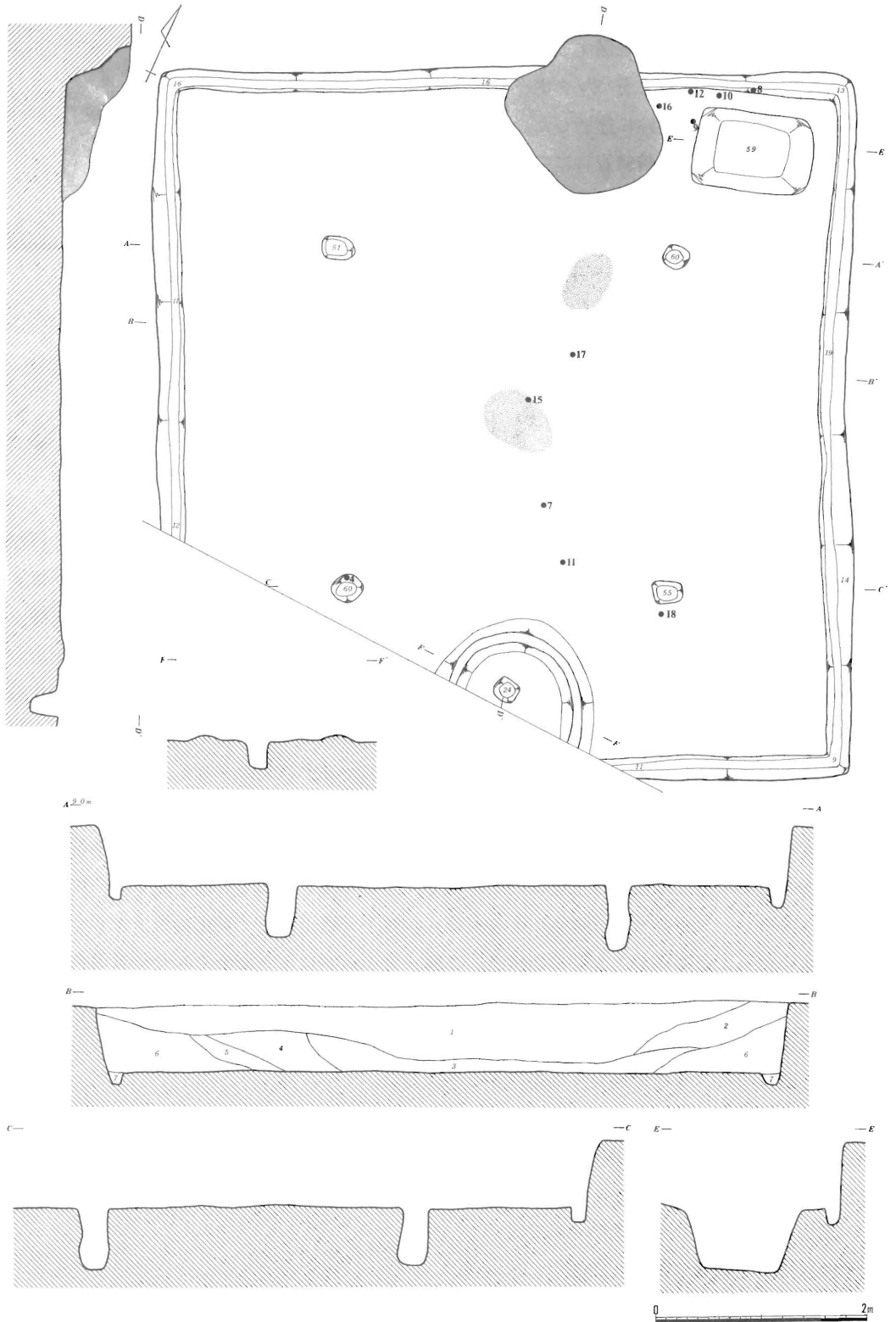
〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕1層中に焼土粒子・炭化物粒子を多く含むことや3層のロームブロックが熱を受けた状態であること、そして覆土中に多くのローム粒子・ロームブロックを含むことから、この住居は焼失後、人為的に埋め戻された可能性がある。

4号住居跡出土遺物 (第21・22図)

土師器坏・埴形土器 (1~6)

1は大ぶりの埴状のもので、丸底の底部から立ち上がり、頸部でややくびれ、口縁部は内湾気味



第20图 4号住居跡 (1/60)

に大きく開く。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられるが、底部には顕著にヘラ削り痕が残る。覆土中の出土で、遺存度は $1/2$ である。

2～4は底部と口縁部の境に明瞭な段をもち、口縁部は大きく外反する。1は口径16.5cmを測る大型のもので、口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられるが、僅かにヘラ削り痕が残る。内面及び外面口縁部は赤彩される。貯蔵穴中の出土で、 $2/3$ 程の遺存度である。3は口径14.5cmを測り、口唇部内面には1条の細線がまわる。色調は全体に明るい橙色を呈する。外面の有段は2・4とは違い、段直上に幅2mmの沈線を補うことによって作出されている。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられるが、ヘラ削り痕が顕著に残る。貯蔵穴中の出土で、口縁部から底部にかけて僅かに欠損する。 $4/5$ 強の遺存度である。4は口径15.5cmを測り、口縁部は途中弱い稜をもちやや肥厚し、口唇部内面には1条の沈線がまわる。底部内面には薄く放射状の暗文がみられ、内外面黒色処理が施される。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はていねいにナデられる。南西コーナー柱穴上からの出土で、遺存度は $4/5$ 程である。

5は底部から体部にかけて半球状を呈し、口縁部は短かく外反する。口唇部内面には1条の弱い沈線がまわる。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は磨かれておりやや光沢を帯びる。赤彩は内面及び外面口頸部に施されるが、内面口縁部のくびれ部分と底部に赤彩の剝離している箇所が観察される。使用時に瀕繁に接触していた部分であろうか。覆土中の出土で、遺存度は $1/3$ 。

6は丸底の底部から立ち上がり、体部上半で内湾し、口縁部は短く直立する。口縁部内外面横ナデ、以下内外面ヘラナデされる。赤彩は内面が口縁部から体部にかけて、外面が底部を除き施される。床面上の出土で、 $1/4$ の遺存度である。

土師器甑形土器（7～10）

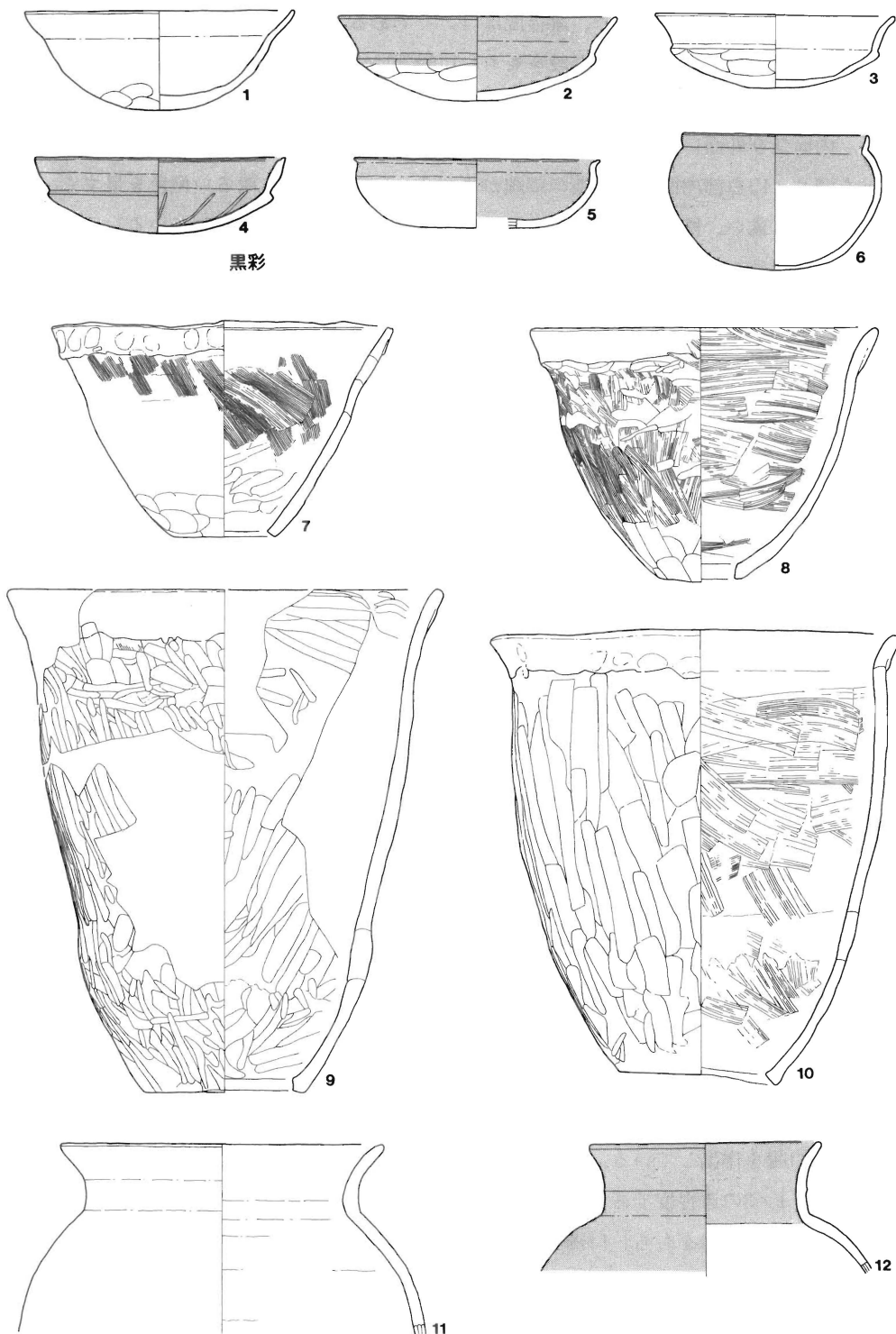
7・8は小型のもので、口縁部に最大径をもち、底部に向って直線的にすぼまる。口縁部は粘土を貼付けることにより複合口縁を呈する。7の口縁複合部には粘土貼付けの際に付されたひだ状の指頭圧痕がみられる。口縁部内外面横ナデ、内面は体部が斜方向のハケ目調整、底部は横方向に細長い磨きが施される。外面は口縁部直下が縦方向のハケ目調整、底部にはヘラ削り痕が顕著に残る。ハケ目調整については、内面のものはナデ的であり、外面のものはスリップであろう。住居中央からやや南壁寄りの床面から25cm浮いた位置で出土し、 $4/5$ 遺存する。8の口縁部下端はナデ調整が施され、複合部と体部との境は不明瞭である。内面は横方向のハケ目調整、外面は口縁部横ナデ、以下ハケ目調整後、若干ナデられる。貯蔵穴北の床面上の出土で、 $3/4$ の遺存度である。

9は長胴で、口縁部から底部にかけて直線的にすぼまる。口縁部は下端にのみ粘土を貼付けることにより複合口縁を作出している。口縁部内外面横ナデ、以下磨き調整が施される。貯蔵穴西の床面上の出土で、 $1/3$ の遺存度である。

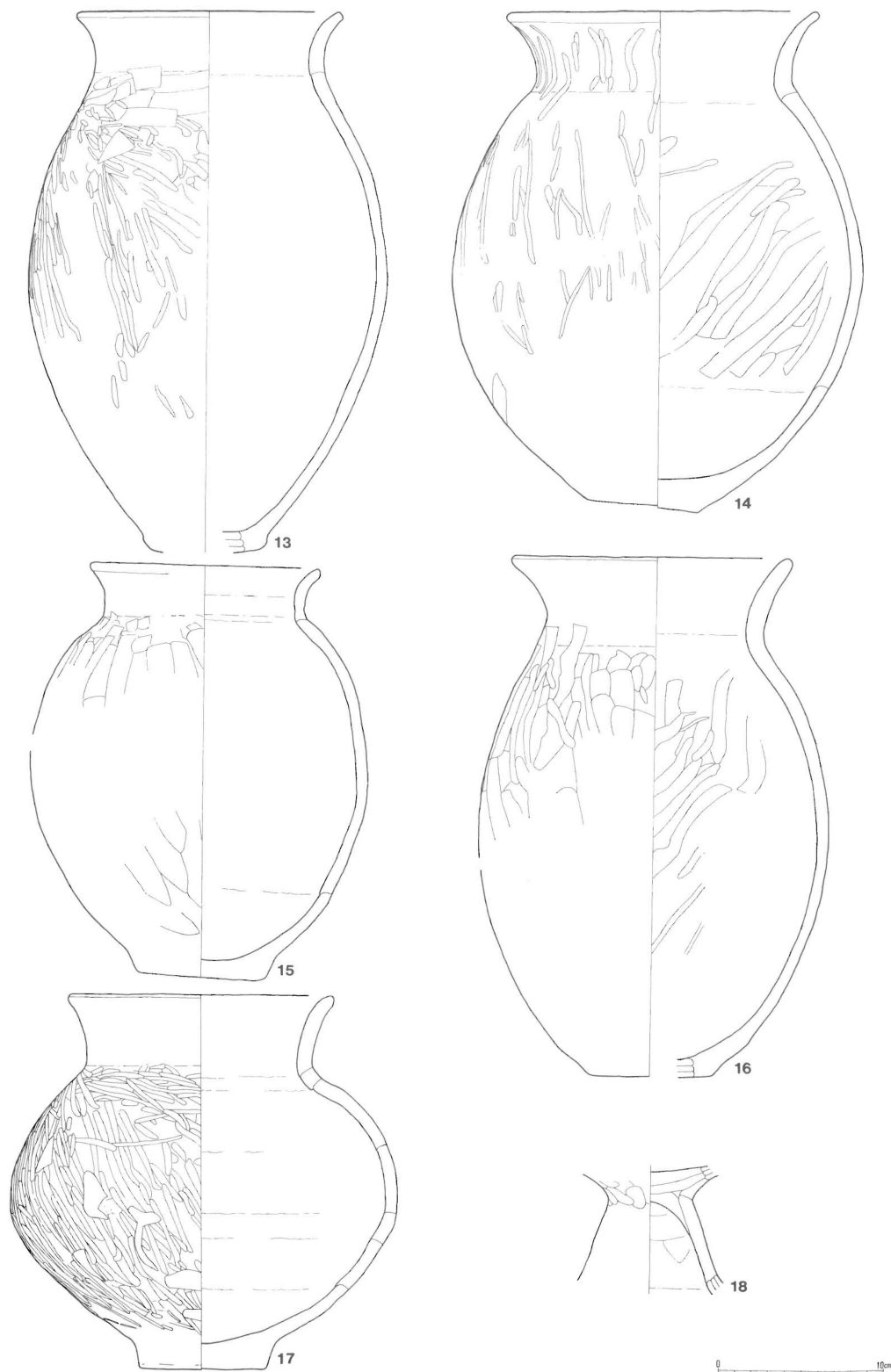
10は9より胴部に丸味をもち、口縁部が外反する。口縁部は粘土帯を貼付けることにより複合口縁を作出している。口縁部内外面横ナデ、以下内面は横方向のハケ目調整、外面は縦方向にスリップが施される。貯蔵穴北の床面上の出土で、ほぼ完形である。

土師器甕形土器（11～17）

11は頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。外面は口縁部横ナデ、以下内外面ていねい



第21図 4号住居跡出土遺物1 (1/4)



第22図 4号住居跡出土遺物2 (1/4)

にナデられる。口縁部内面は剝落しており不明。覆土中の出土で、口縁部から胴部中位にかけて、1/3程遺存する。

12は壺形になる可能性もある。口縁部途中には明瞭な稜線が1条まわり、外面及び口縁部内面は赤彩される。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられる。貯蔵穴西の床面上の出土で、胴部中位以下を欠損する。

13は胴部中位に最大径をもち、胴部から頸部への移行はスムーズで、口縁部は外反する。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ後、底部から胴部中位にかけて細長い磨きが若干施される。外面は横方向のヘラナデ後、斜方向の細長い磨きが施される。貯蔵穴中及びその付近の床面上の出土で、1/3程の遺存度である。

14は球状の胴部を呈し、胴部中位に最大径をもつ。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられる。その後、細長い磨きが内面には胴部に、外面には頸部から胴部にかけて施される。貯蔵穴中の出土で、完形である。

15は球状の胴部を呈し、胴部中位に最大径をもつ。14に比べ、肩が強く張った器形である。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は斜方向にヘラナデ（スリップか）が施される。住居中央付近の床面から20cm浮いた位置で出土し、遺存度は1/3程である。

16は13と同様にやや長胴を呈する。口頸部内外面横ナデ、以下内外面ヘラナデ後、細長い磨きが施される。貯蔵穴西の床面上の出土で、1/2程の遺存度である。

17は算盤玉のようなややつぶれた球状の胴部と直立ぎみに開く口頸部をもつ。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は斜方向の磨きが施され光沢を帯びる。内面には輪積み痕が顕著に残る。住居中央の床面上から約10cm浮いた位置で出土し、ほぼ完形である。

土師器高環形土器 (18)

脚部破片である。脚柱部は裾部に向かって「ハ」字状に開く。坏部は内面が磨き、外面がヘラ削り、脚部は内面がヘラナデ、外面がナデられる。外面には部分的に赤彩箇所がみられるが、全面に赤彩が施されるかどうかは不明である。南東コーナー柱穴付近の床面から20cm浮いた位置で出土。

第3節 ま と め

1. 南壁に付設された凸堤と小ピットについて

今回の中野遺跡第12地点の調査で検出された古墳時代後期鬼高式期の住居跡は、南壁に凸堤と小ピットを付設することで注目される。

南壁に付設された凸堤と小ピットについては、これまで市内からの検出例はないが、富士見市打越遺跡では、これに類似するものが確認されている。しかし、その凸堤の付設位置を観察すると、打越遺跡の例と本住居跡のものは住居跡南壁に付設されていることで共通するが、住居構造上でみれば、打越遺跡の例はカマドに直交する面に、本住居跡のものはカマドに対向する面に位置することで相反する（第23図）。

群馬県子持村黒井峯遺跡では、今まで推測にすぎなかった古墳時代の竪穴式住居跡等の建物の構

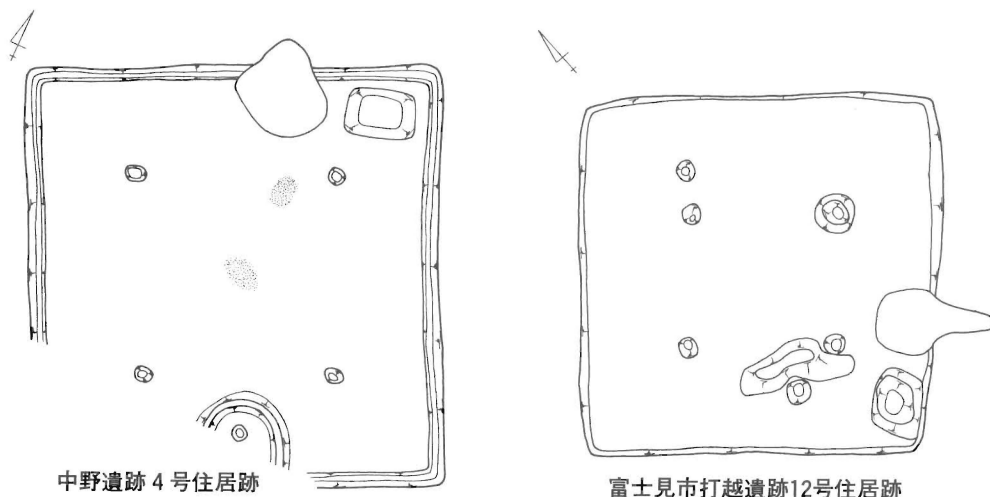
造や集落を構成する家屋単位などが明らかにされている。特に、竪穴式住居跡のカマドと入口の配置関係のみてみると、カマドは住居東壁中央からやや南側に偏って位置し、入口部はその南側に設けられ、カマドと入口部は直交している。このことは、打越遺跡のカマドと凸堤及び小ピットの配置関係に共通し、可能性として、打越遺跡の凸堤と小ピットは黒井峯同様に入口部に該当する施設と考えられる。

さて、入口部とカマドについては、柿沼幹夫氏が、埼玉県児玉地方の和泉式期以降のカマドをもつ住居跡の分析により、入口部とカマドとを直交する位置に想定している。

これについて、児玉郡上里町壹遺跡の中で、中村倉司氏が卓見として評価しているものの、入口部については、「カマドに向かい合う壁上」に想定できることやカマドについては、「左カマドを忌み嫌う観念がカマド導入段階から存在していたという考えも理解し難い」などというように細部については検討の余地があることを述べている。中村氏が入口部を「カマドに向かい合う壁上」に想定した理由としては、次のとおりである。

- ① 柿沼氏が入口部を有する典型的なものとして示した周堤をもつピットは、弥生時代に典型的にみられるいわゆる貯蔵穴である。
- ② 入口部の梯子穴と考えられたピットは炉に向かい合う壁に存在する。
- ③ カマドに向かい合う壁に、入口部施設だといわれている方形の張り出し部を有す住居跡が中田遺跡を典型として各地で検出されている。
- ④ 床の硬い面の範囲から入口部、土間を想定すると入口部をカマドに向かい合う壁に想定することが無理のない考えである。

この中で、①については、本住居跡にみられる凸堤と小ピットと共に、弥生時代の周囲を凸堤によって囲まれた貯蔵穴と類似するが、この凸堤をもつ貯蔵穴が、城山遺跡69号住居跡でカマド右横で検出されていることやそのピットの規模から、これらは全く別のものと考えられる。しかし、他の②～④についてはその可能性も十分あるものと思われる。



第23図 住居構造の対比 (1/120)

また、高橋一夫氏は千葉県上ノ台遺跡などの分析から、入口部をカマドに対向する壁に想定している。これについても前段階に従来の住居空間の利用法を受け継いでカマドに対向する壁に入口部を設け、土間の概念の導入と共にカマドの付け替えが行われたものとしている。

宮崎由利江氏は、柿沼・高橋両氏の視点に立ち、大宮市C-1号遺跡第6号住居跡を「この住居の時期が鬼高期の最初の頃の段階のものであり、まだ土間概念の導入以前のものとするればD部が入口部でカマドの対岸にあっても矛盾はないのである」と説明している。

これらの分析から考えると、今回検出された住居跡もまだ土間概念の導入以前のものであれば、入口部がカマドに対向する壁にあってもよいことになる。^{註1}

そこで、当地域の弥生～古墳時代の住居構造の変遷を整理してみることにする。まず、弥生時代の住居跡をみると、入口部は炉に対向する壁際に梯子穴が設けられ、貯蔵穴は周囲を凸堤によって囲まれ入口から入ってすぐ右側に存在した。やがて、古墳時代後期になると、炉に代わってカマドが構築され、貯蔵穴はカマドの左右に設けられるようになる。入口部は本住居跡のように仮にカマドと対向する位置に想定したとすると、弥生時代の炉と入口部の関係に無理なく当てはまる。たとえば、カマドが構築されたとしても未だ入口部はカマドとは直交せずにカマドに対向していたとする考え方である。貯蔵穴は入口部の位置が変化しないにもかかわらず、カマドの出現時に入口部の右側からカマドの真横というように、以降カマドに付随した形で定着する。^{註2}

このように、カマド構築以前の住居構造から考えても、本住居跡の南壁に付設された凸堤と小ピットが入口部の施設と理解することは無理のないことであろう。^{註3}

なお、古墳時代後期以降の奈良・平安時代になってもカマドに対向する壁際に入口部の梯子穴と思われる小ピットが検出される例も少なくないことから、大きく住居構造を“入口部とカマドは対向”から“入口部とカマドは直交”へ変化至らしめた決定的要因については、前述した諸氏のいう理由ではまだまだ納得のいかないものである。また、両者の違いについては上屋構造・空間利用の決定的な違い、さらにカマド導入の重要な問題にもつながるなど、今後、もっと小地域あるいは集落内での変遷についての緻密な研究が要求されよう。

2. 4号住居跡出土土器について

本住居跡からは、土師器・埴輪・甗形土器、甗形土器、甗形土器と豊富な土器が出土している。

埴輪・甗形土器は、2～4が有段埴輪であるが、2は内面及び外面口縁部が赤彩されているもの、3は明るい橙色を呈したもの、4は内面に放射状の暗文がある黒色土器というようにバラエティーがみられる。1・5・6は埴輪状のもので、5はいわゆる比企型埴輪である。口径14.5cmとやや大きいタイプで、口縁部は短く外反し、口唇部には沈線は認められない。6は前段階和泉式の系譜下にあるものと思われる。全体に大型の傾向がうかがえる。

甗形土器は、小型（7・8）・大型（9・10）に分かれる。前者は口縁部が複合口縁を呈し、内外面にハケ目痕を顕著に残す。後者については、内外面磨き調整が施されるもの（9）、内面にハケ目痕を顕著に残すもの（10）がある。

甗形土器は、球胴であるもの（17）、頸部から口縁部の移行はスムーズで、胴部に脹らみを有するが長胴であるもの（13・16）、その中間のもの（14・15）、口縁部途中に1条の稜線をもち赤彩され

るもの(12)に大まかに分類できる。調整については、主に磨き調整が施されている。

以上、本住居跡出土の土器の特徴・構成は、城山遺跡65号住居跡のそれと類似することから、大まかに6世紀中葉に比定できよう。

[註]

- (1) 土間の概念、「右勝手」・「左勝手」という問題については、通念的・精神的であるため、それを考古学で導くのは非常に難しく、また筆者の不勉強さのために敢えてここでは触れないものとしたが、打越遺跡では1・2・6・7・11号住居跡が、前述したカマドと直交する一辺に入口部を想定した場合、「左勝手」になることから、中村氏と同様に忌み嫌われているような通念あるいは共同体内の特別な制約があったとは考えられない。
- (2) 中野遺跡3号住居跡は、カマドをもつ住居跡では市内で最も古い住居跡と考えられる。住居構造は、カマドが西壁の南寄りに設けられ、その左横には貯蔵穴が存在する。さらに、住居北東コーナーには別の貯蔵穴があり、住居中央には炉跡が存在する。予察として、この住居跡は炉からカマドに作り替えが行われた住居跡ではないかと思われる。しかし、打越遺跡20号住居跡、鴻巣市生田塚遺跡C地点1号住居跡、所沢市日向遺跡第14号住居跡、後張遺跡22号住居跡などのように、前段階には貯蔵穴がカマドに対向する壁際に設けられた時期があるのかもしれない。
- (3) これは、「炉からカマドへ」という派生を意味するものではない。炉からカマドへの変化はそこに住む同一人物の中で住居の作り替えが行われたものと仮定した時、カマドを設けるためにわざわざ違う所に別の住居を新築する必要があったとは考えられない。

[引用・参考文献]

- 会田 明他 1978 『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集
 1983 『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集
- 石井克己 1987 「黒井峯遺跡の概要」『月刊文化財9』第一法規
- 柿沼幹夫 1979 『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集
- 金井浩雄他 1984 『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書第12集
- 佐々木保俊・尾形則敏 1985 『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点』志木市遺跡調査会調査報告第1集
 1988 『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告書第5集
 1989 『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
- 高橋一夫 1983 「集落分析の一視点」『埼玉考古』第21集
- 立石盛詞他 1983 『後張 本文編・図版編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 中村倉司他 1980 『臺遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第41集
- 宮崎由利江 1911 『市内遺跡群発掘調査報告 C-1号遺跡』大宮市文化財調査報告第29集
- 山崎 武 1986 『鴻巣市遺跡群Ⅰ』鴻巣市文化財調査報告第1集

第4章 田子山遺跡第6地点

第1節 遺跡の概要

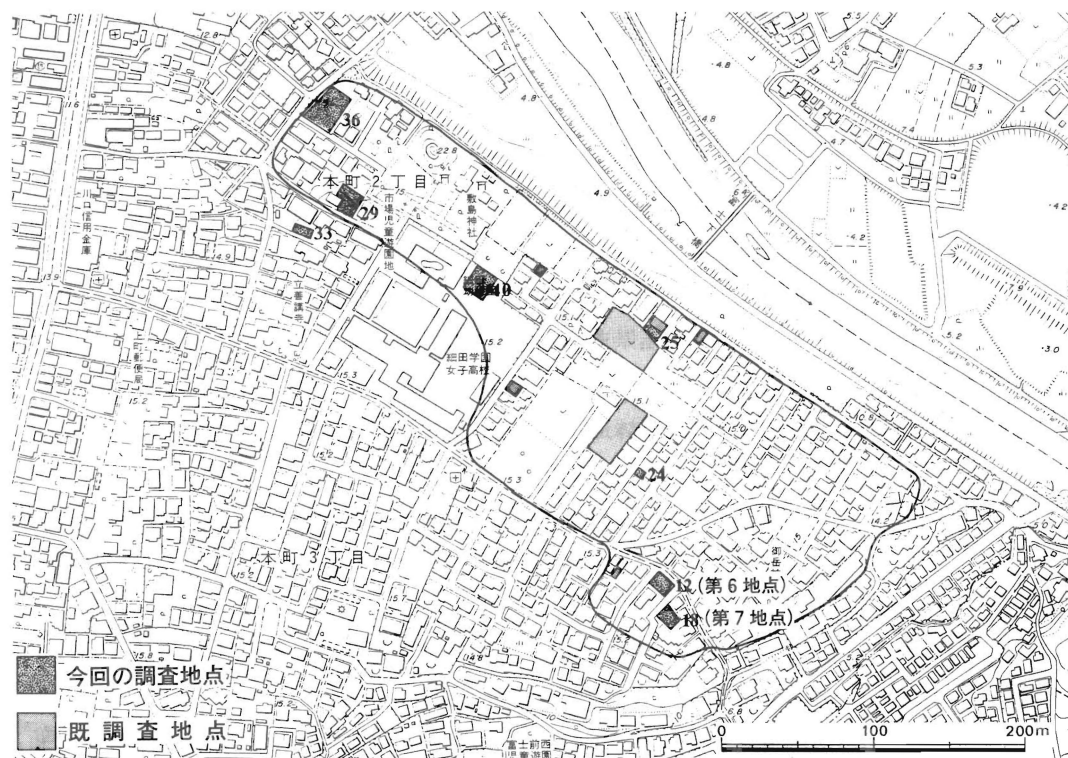
(1) 立地と環境

田子山遺跡は、武蔵野台地野火止台の最先端部に位置する遺跡で、台地下、北東方向には舟運のあったことで著名な新河岸川が南東流する。また、遺跡の南東には新河岸川に直交する谷が入り込んでいる。遺跡の標高は約15m、低地との比高差約10mを測る。遺跡の現況は、大部分が宅地化されているが、再開発のための調査が増加しつつある。

本遺跡は、弥生時代後期の集落跡として知られてきたが（佐々木 1990）、その後の志木市遺跡調査会の調査により、縄文時代中期、古墳時代後期、平安時代の集落跡であることも判明してきている。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成2年6月7日から開始した。調査区に合わせて、北東―南西方向に3本、北西―南東方向に1本のトレンチを設定、バックホーを使用して確認調査をしたところ、調査区西隅に住居跡状の掘り込みが検出されたため、周囲の表土を除去した。翌日、プランの確認作業を行った



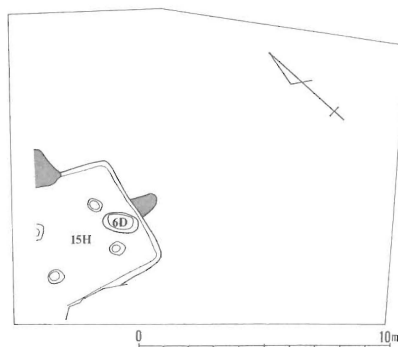
第24図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

結果、平安時代の住居跡であることが明らかとなり、精査を開始した。13日には住居跡の覆土を切って土坑を1基検出、併わせて調査を行う。14日には住居跡・土坑の写真撮影・実測を実施し、18日にはカマドの図化も終了、実質的な調査を終えた。なお、30日には埋め戻しも完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

15号住居跡（第26図）

〔住居構造〕住居西側は調査区外にあり、南壁の一部には攪乱が入る。6号土坑に切られる。（平面形）柱穴の間隔から考えると、長方形になる可能性が高い。（規模）不明×4.8m。（壁高）65cm前後を測り、急斜に立ち上がる。（床面）中央部分を除いて貼り床となる。壁際を除いてよく踏み固められている。（カマド）東壁から北壁への移動がみられる。北カマドは壁のほぼ中央に位置する。西側1/2程は調査区外にある。長さ155cm、壁への掘り込み120cmを測り、天井部・袖部は灰白色粘土で構築される。



第25図 遺構分布図 (1/300)

掛け口付近から土製支脚が検出された。東カマドは壁のほぼ中央に位置し、袖部は除去されている。壁への掘り込みは100cmを測り、天井部は灰白色粘土で構築される。（柱穴）検出された4本が主柱穴と考えられる。（覆土）1層—攪乱、2層—黒褐色土、3層—暗褐色土（ローム粒子を僅かに含む）、4層—暗褐色土（ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む）、5層—灰褐色土（粘土粒子を多く含む。焼土粒子を含む）、6層—暗褐色土（ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む）。4～6層は基本的には同一土層とみられ、一気に埋没したことがうかがえる。また、北東コーナーに近い東壁下の最下層に焼土の堆積が認められた。

〔遺物〕床面上の遺物は、南壁側に多く認められた。また、覆土中から須恵器・土師器の小片の出土がめだつ。

〔時期〕国分式期。

15号住居跡出土遺物（第27・28図）

須恵器环形土器（1～14）

口径15cmを越える大型のものから10cm台の小型のものまでバラエティーがあるが、12cm台のものが半数を占める。底径は口径の1/2以下のものが大部分である。底面には、いずれも回転糸切り痕を残す。2～4・8・11・14は黄橙色から黄褐色を呈する。いわゆる赤焼きの土器である。

1は口径14cm、底径6.2cm、器高5.5cmを測る。厚手の土器で、体部は内湾しながら開く。1/2強の遺存度で、南西コーナー付近の床面上の出土。

2は口径14.7cm、底径5.7cm、器高5.5cmを測る。体部はほぼ直線的に開く。4/5程の遺存度で、住居南側の床面上の出土。

3は口径15.4cmを測る大型の土器。体部は内湾しながら開き、口縁部は僅かに外反する。体部下端以下を欠く。覆土中の出土。

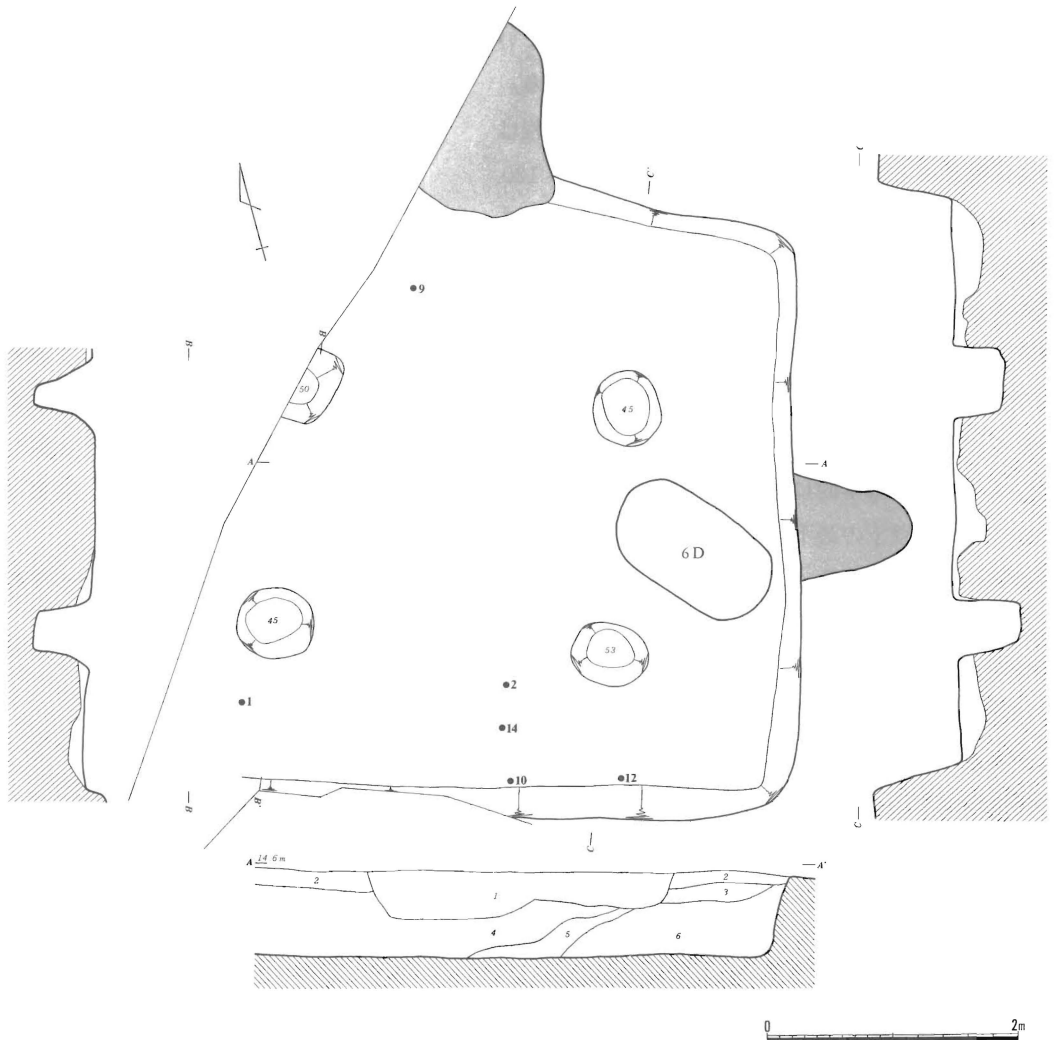
4は口径（推定）13.8cm、底径6.9cm、器高4cmを測る。体部は僅かに内湾しながら開く。1/3程の遺存度で、覆土中の出土。

5は口径12.3cm、底径5cm、器高3.8cmを測る厚手の土器。体部は僅かに内湾しながら開く。1/2程の遺存度で、覆土中の出土。

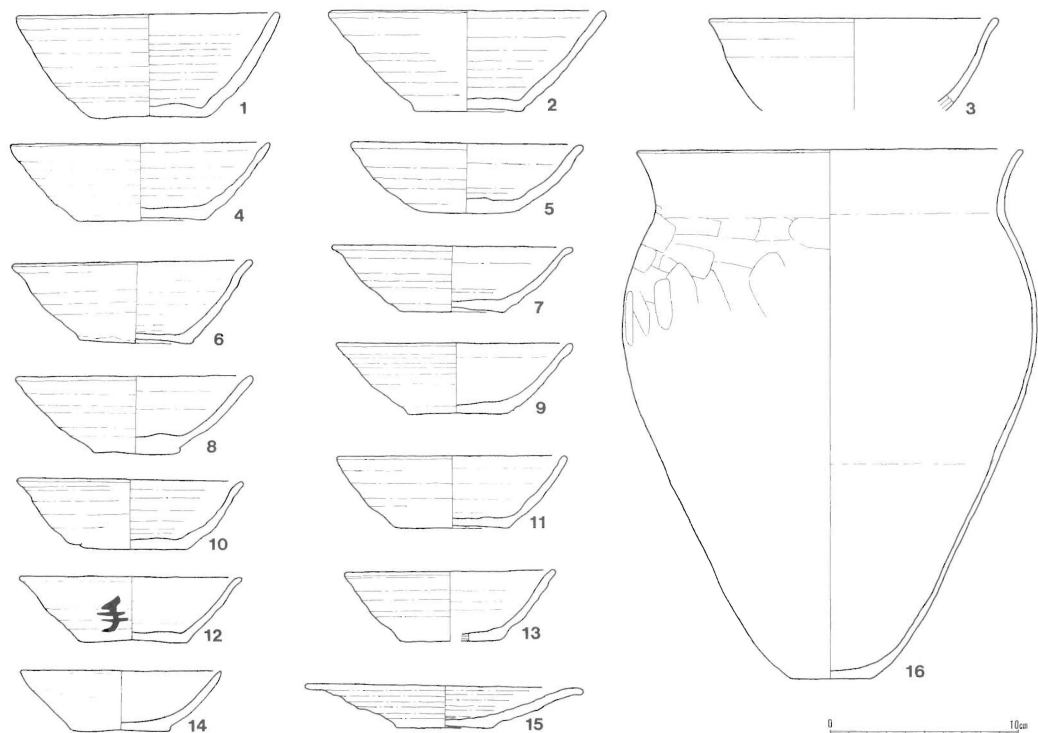
6は口径12.3cm、底径6cm、器高4.3cmを測る。体部は僅かに内湾しながら開き、口縁部は外反する。2/3程の遺存度で、覆土中の出土。

7は口径（推定）12.8cm、底径5.5cm、器高3.5cmを測る浅めの土器。体部は内湾しながら開き、口縁部は外反する。1/3程の遺存度で、覆土中の出土。

8は口径12.7cm、底径4.5cm、器高4.1cmを測り、口径に比して底径の小ささがめだつ。体部は



第26図 15号住居跡 (1/60)



第27図 15号住居跡出土遺物1 (1/4)

僅かに内湾しながら開く。2/3程の遺存度で、覆土中の出土。

9は口径12.6cm、底径5.2cm、器高3.8cmを測る。体部はやや直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。口縁部の一部を欠損する。北カマド前の床面上の出土。

10は口径12.1cm、底径5.5cm、器高3.8cmを測り、体部は内湾しながら開き、口縁部は僅かに外反する。1/2強の遺存度で、南壁下床面上の出土。

11は口径(推定)12.3cm、底径6cm、器高3.9cmを測る。体部は僅かに内湾しながら開く。1/4程の遺存度で、覆土中の出土。

12は口径11.8cm、底径5.6cm、器高3.4cmを測る。口縁部は短く外反する。体部中位には「手」という字が墨書されている。1/2強の遺存度で南東コーナーに近い南壁下床面上の出土。

13は口径(推定)11.2cm、底径(推定)5.4cm、器高3.4cmを測り、体部は僅かに内湾しながら開く。1/4程の遺存度で、覆土中の出土。

14は口径10.7cm、底径5.3cm、器高3.1cmを測るカワラケを思わせるような土器。ロクロ成形土師器としたほうがよいかもしれない。体部は内湾しながら開く。口縁部の一部を欠損する。住居南側の床面上の出土。

須恵器皿形土器 (15)

口径14.7cm、底径5cm、器高2.2cmを測る。体部は直線的に大きく開き、口縁部は外反する。底面には回転糸切り痕を残す。口縁部を一部欠損する。覆土中の出土。

土師器甕形土器 (16)

口径20.6cm、底径4.2cm、器高28.2cmを測る。最大径を胴部上位にもち、頸部は弱くくびれ、口縁部は僅かに外湾しながら立ちぎみに開く。口縁部内外面は横ナデ、肩部外面は横位のヘラ削り、胴部外面はヘラ削りされるが不明瞭である。内面はヘラナデされる。2/3程の遺存度で、北カマド中の出土である。

土錘 (17)

長さ4cm、最大径1.5cm、重量5.8gを測る。覆土中の出土。

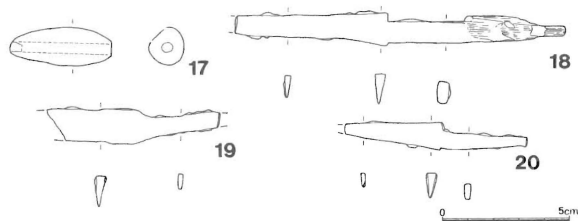
刀子 (18~20)

18は切先を欠く。現存長13.1cm、身幅1.3~0.7cm、背幅0.4~0.2cm、茎長7cmを測る。関は両関で、背は平らである。茎は長く一部に木質が残る。

東カマド中の出土。

19は身先端部と茎の一部を欠く。現存長6.8cm、身幅1.2cm、背幅0.4cmを測る。関は背側の片関となろうか。背は平らである。覆土中の出土。

20は小型の刀子で、切先を欠く。現存長7.2cm、身幅1.1~0.4cm、背幅0.4~0.2cmを測る。関は両関で、背は平らである。覆土中の出土。



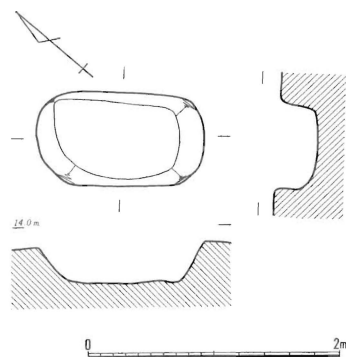
第28図 15号住居跡出土遺物2 (1/3)

6号土坑 (第29図)

〔構造〕15号住居跡を切る。15号住居跡を調査中に確認されたため、規模などについては不正確な部分がある。(平面形)隅丸長方形。(規模)130×75cm。(深さ)30cm。坑底は平坦で、壁は短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がり、長軸方向では60度前後の角度で立ち上がる。(覆土)ローム粒子を僅かに含む黒色土の単一土層である。

〔遺物〕国分式期の土器片が出土するが、15号住居跡からの流れ込みであろう。

〔時期〕不明。覆土の状態から歴史時代(中・近世)のものと考えられる。



第29図 6号土坑 (1/60)

〔引用・参考文献〕

佐々木保俊 1990「田子山遺跡第1地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集

第5章 田子山遺跡第7地点の調査

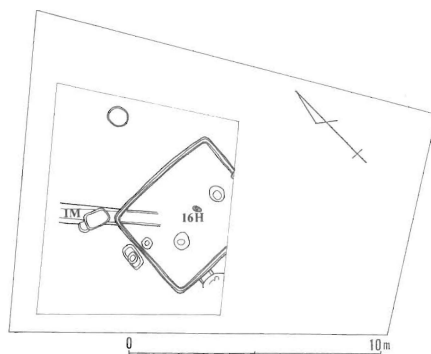
第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第4章第1節(1)を参照。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成2年7月17日から開始した。調査区に合わせて、ほぼ南北方向に2本のトレンチを設定し、バックホーにより確認調査を行う。その結果、住居跡と思われる掘り込みと溝跡、ピットが検出されたため、その部分の拡張を行った。翌日、遺構のプラン確認作業を行い、住居跡が平安時代のものであることが判明、また、溝跡1条・ピット7本を検出し、各遺構の調査にかかった。20日には全ての遺構の調査を終了、写真撮影・実測を行い、埋め戻しを残し調査を終えた。



第30図 遺構分布図 (1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

16号住居跡 (第31図)

〔住居構造〕南東コーナー部は調査できなかった。1号溝跡に切られる。(平面形)長方形。(規模)4.95×4.15m。(壁高)35cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)幅15cm、深さ10cm前後を測り、全周するものと思われる。(床面)壁際を除いてよく踏み固められている。住居ほぼ中央に床面が焼けている部分があるが、炉として使用されたかどうかは不明。(カマド)東壁のほぼ中央にカマドの袖部と思われる粘土を検出したが、調査できなかった。(柱穴)住居に伴うピットは検出されなかった。(覆土)ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

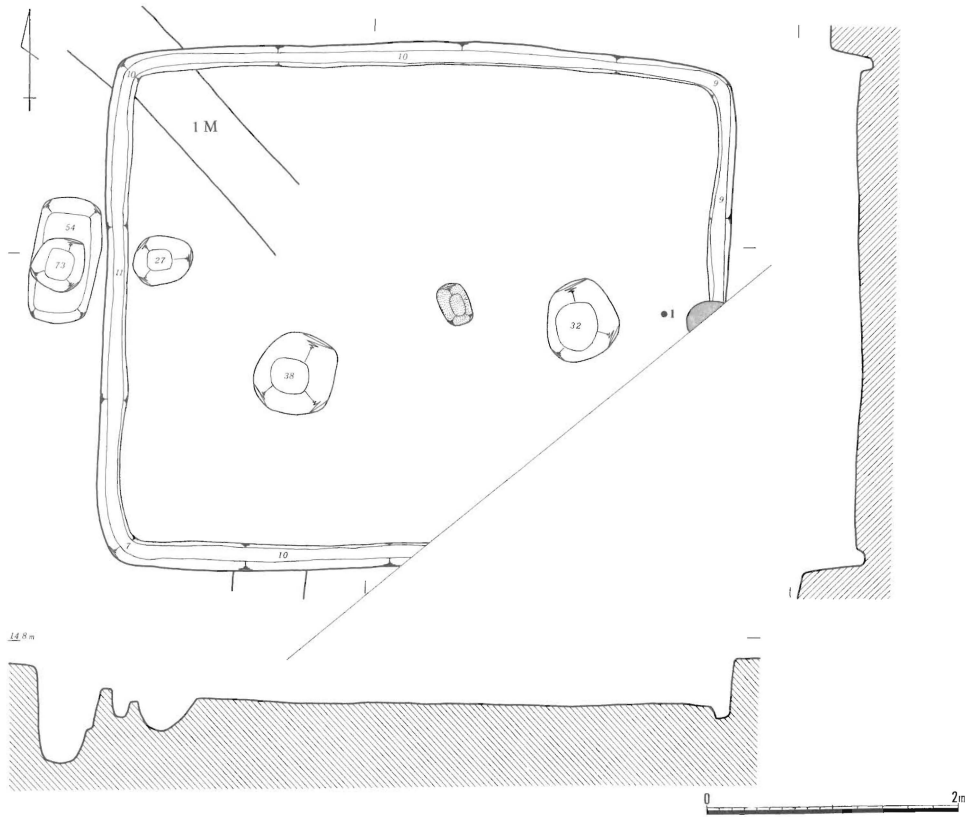
〔遺物〕僅かな出土であった。

〔時期〕国分式期。

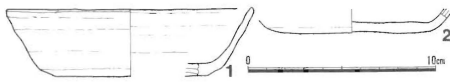
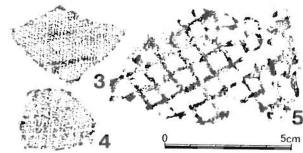
16号住居跡出土遺物 (第32・33図)

1・2とも須恵器坏形土器。

1は口径13.2cm、底径8cm、器高3.6cmを測るが、1/5程の破片からの復元実測のため、数値に関しては若干疑問を残す。回転ヘラ削りされた底部から体部は直線的に開く。カマド前の床面上の出土。



第31図 16号住居跡 (1/60)

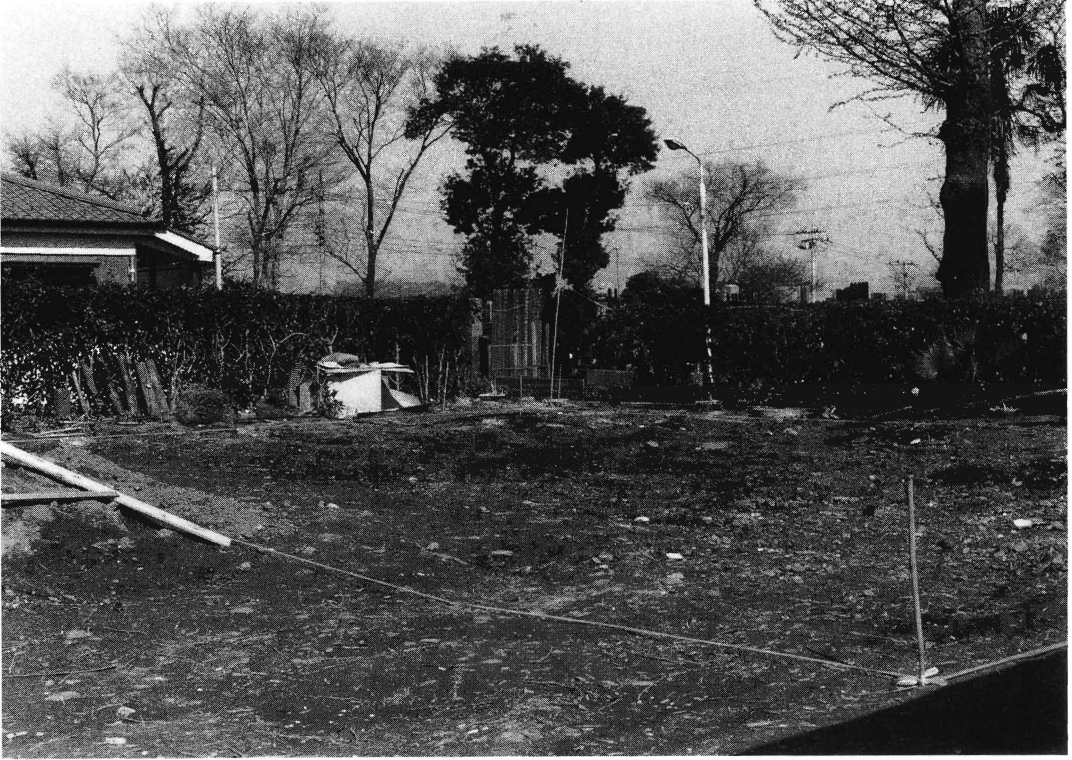
第32図 16号住居跡出土遺物 1
(1/4)

第33図 16号住居跡出土遺物 2 (1/3)

2は底径7.9 cmを測る底部破片。底面は全面回転ヘラ削りされる。覆土中の出土。

3～5は平瓦片。いずれも剝離しているため、厚さなどは不明である。3・4は布目痕を、5は格子叩き目痕を残す。

版 圖



調査区近景



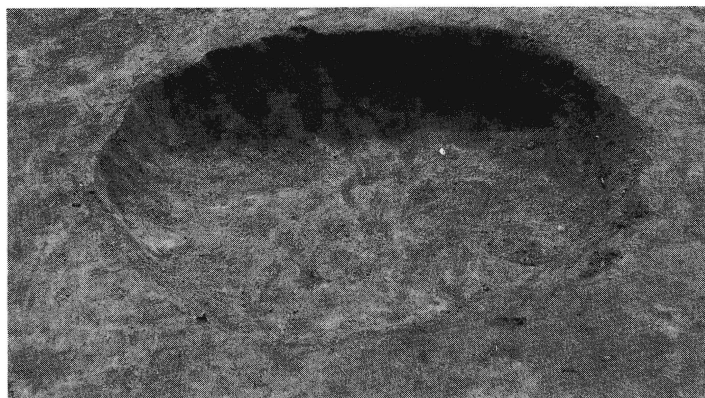
発掘風景



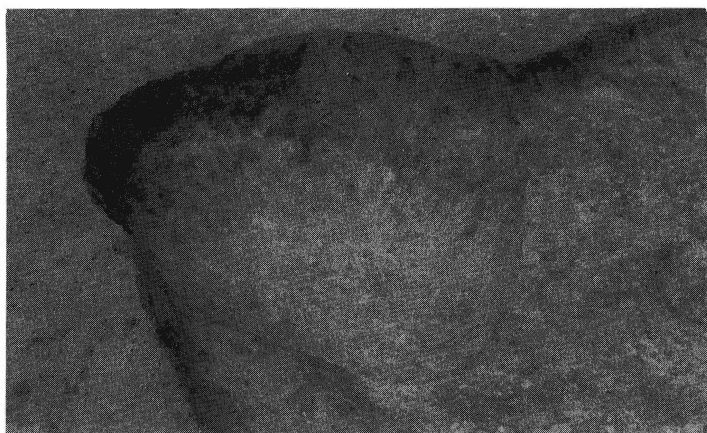
縄文時代1号住居跡



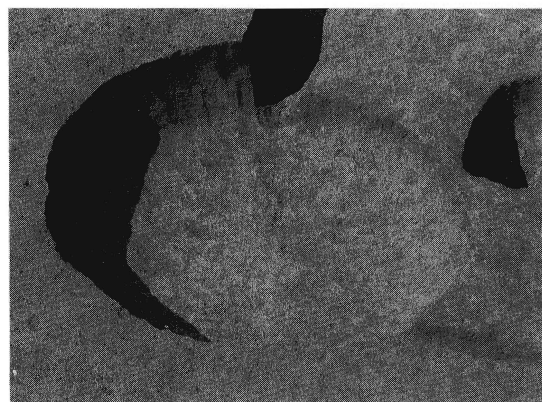
埋甕埋設状態



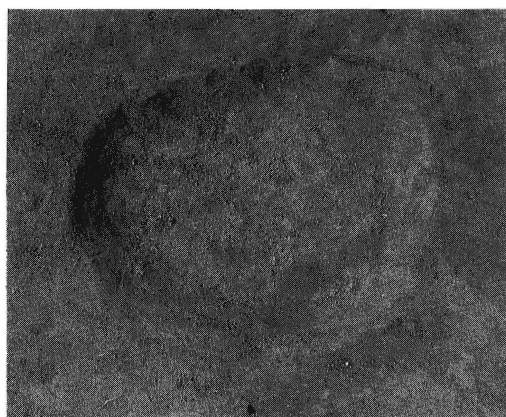
67号土坑



69号土坑

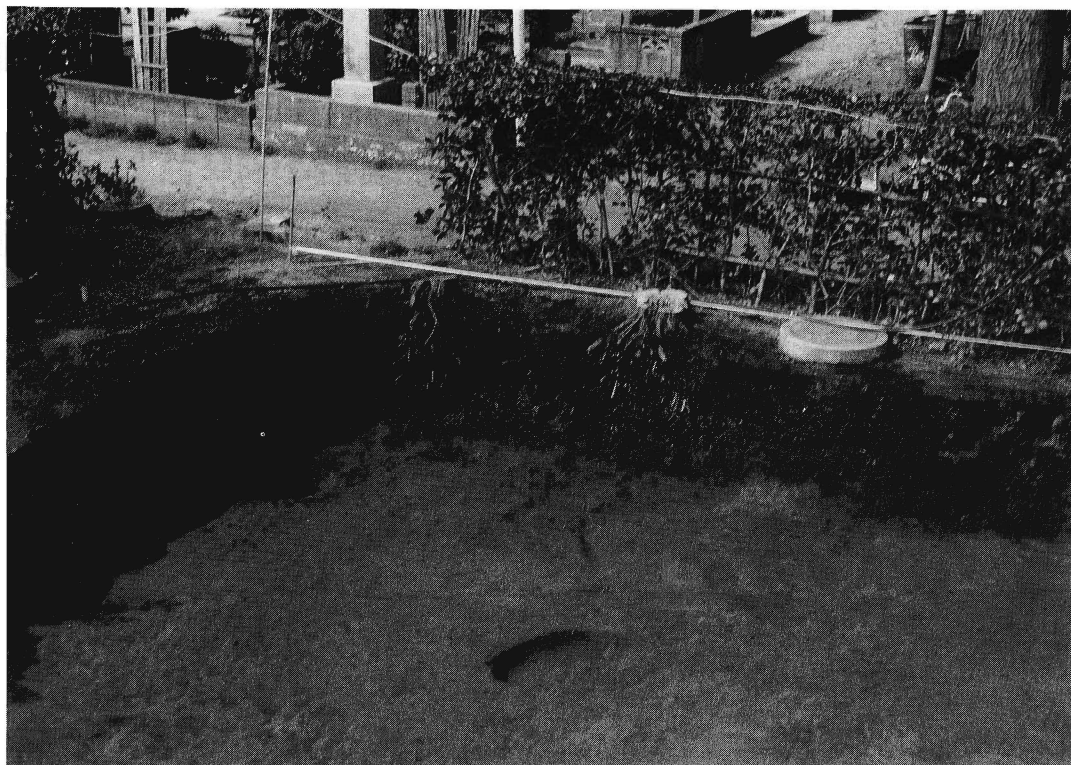


71号土坑

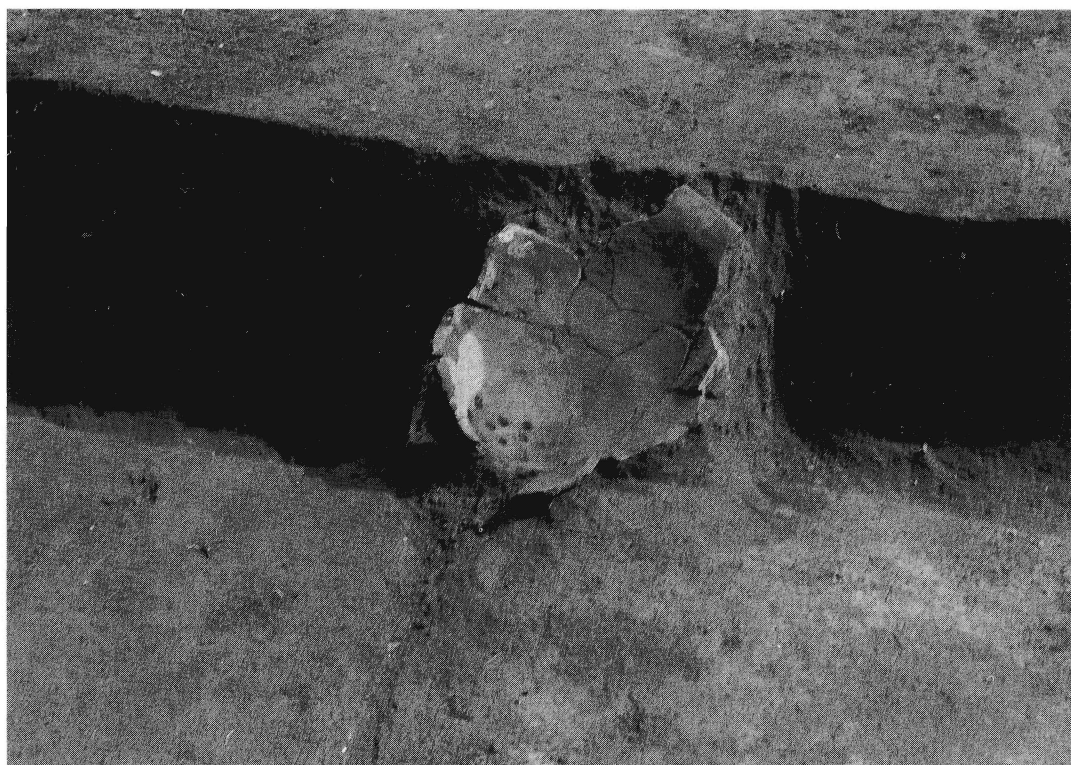


1号炉穴

図版四
城山遺跡第一地点



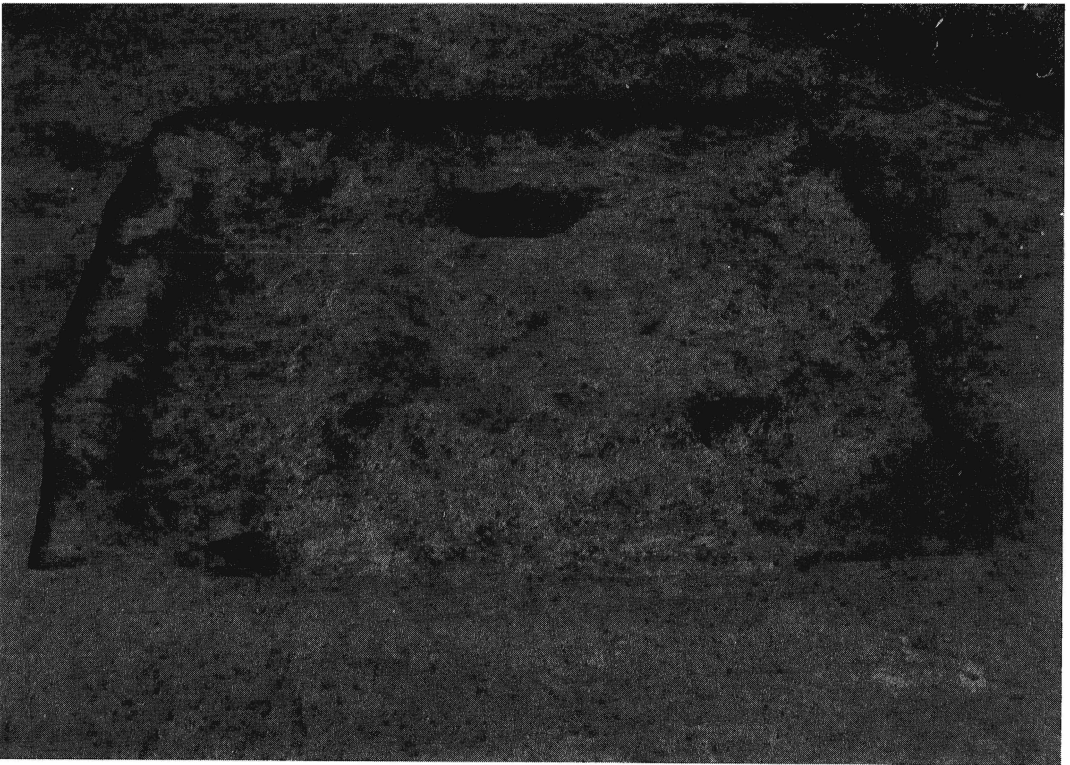
古墳時代76号住居跡



76号住居跡遺物出土状態

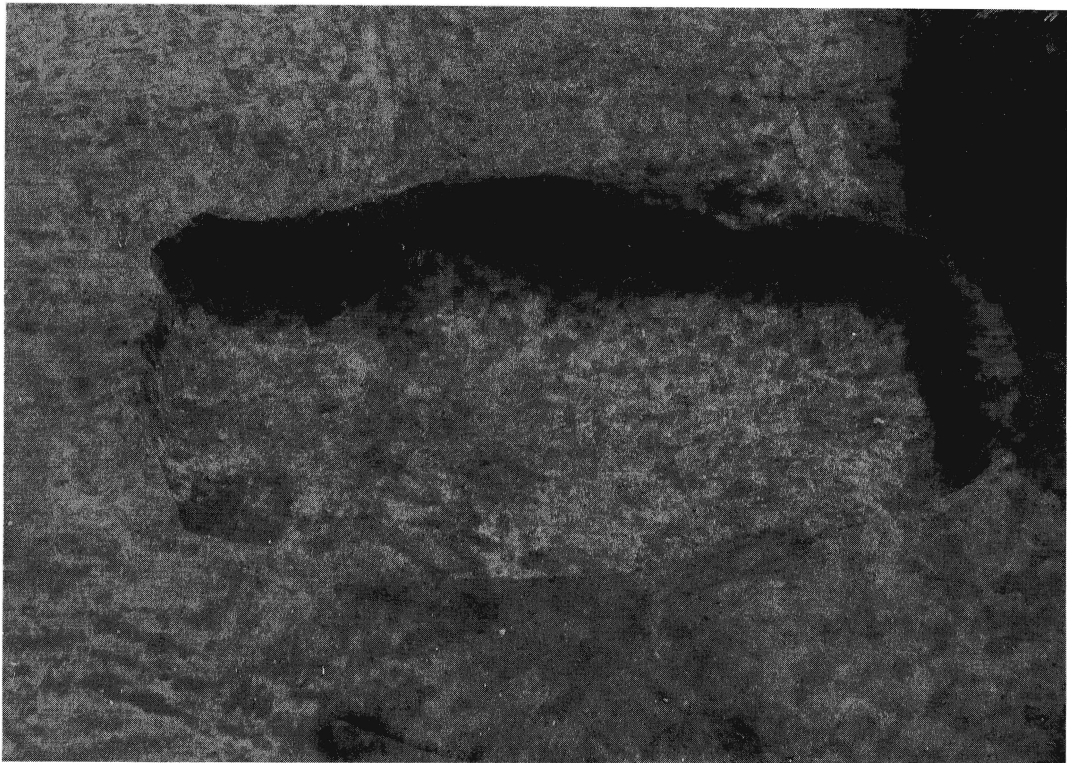


古墳時代77号住居跡

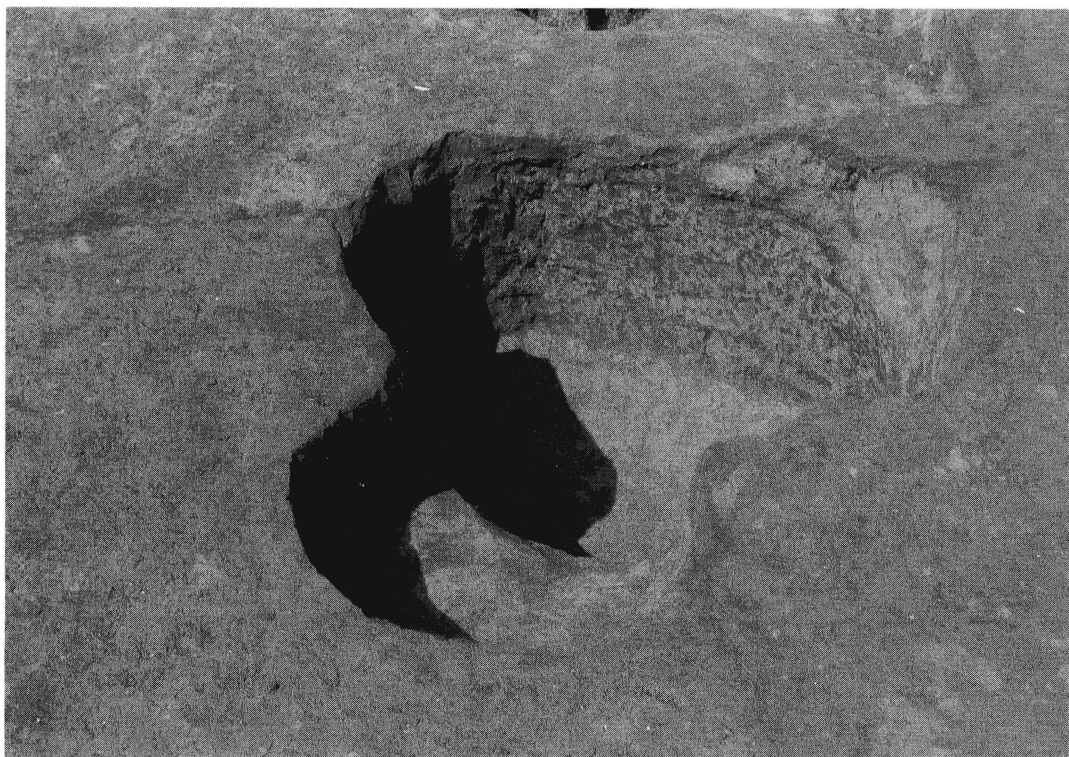


古墳時代78号住居跡

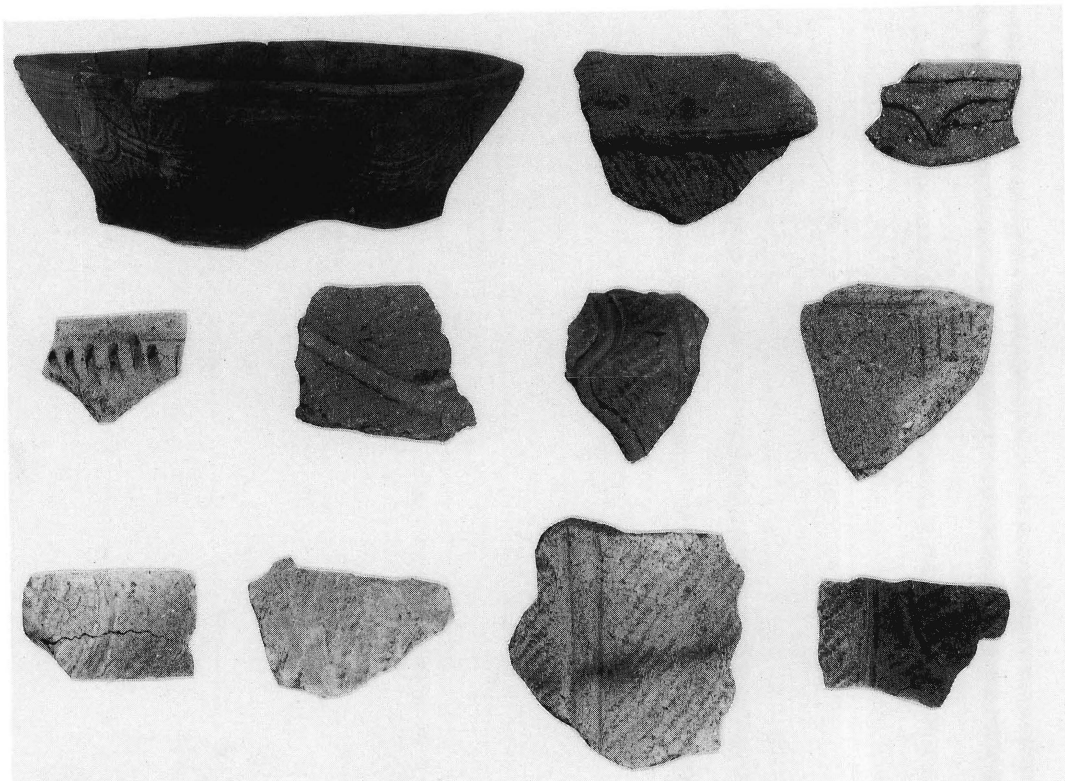
图版六
城山遺跡第一地点



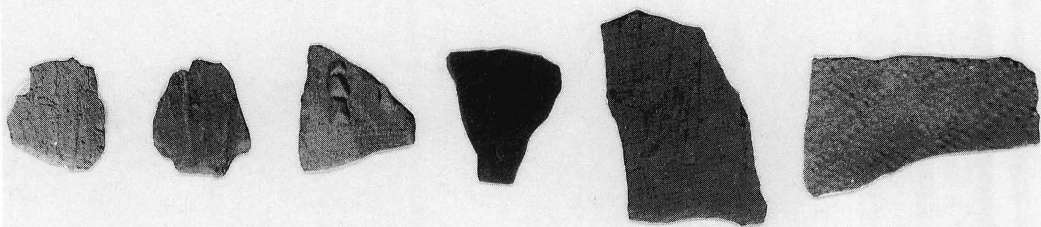
66号土坑



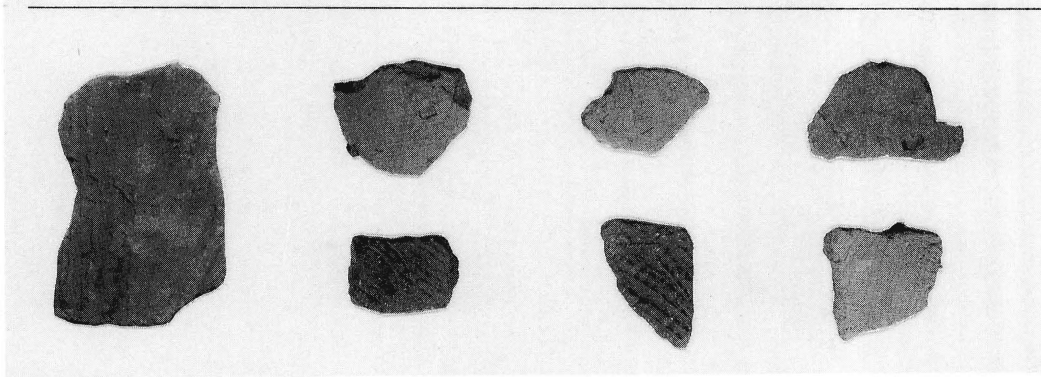
70号土坑



1号住居跡出土遺物



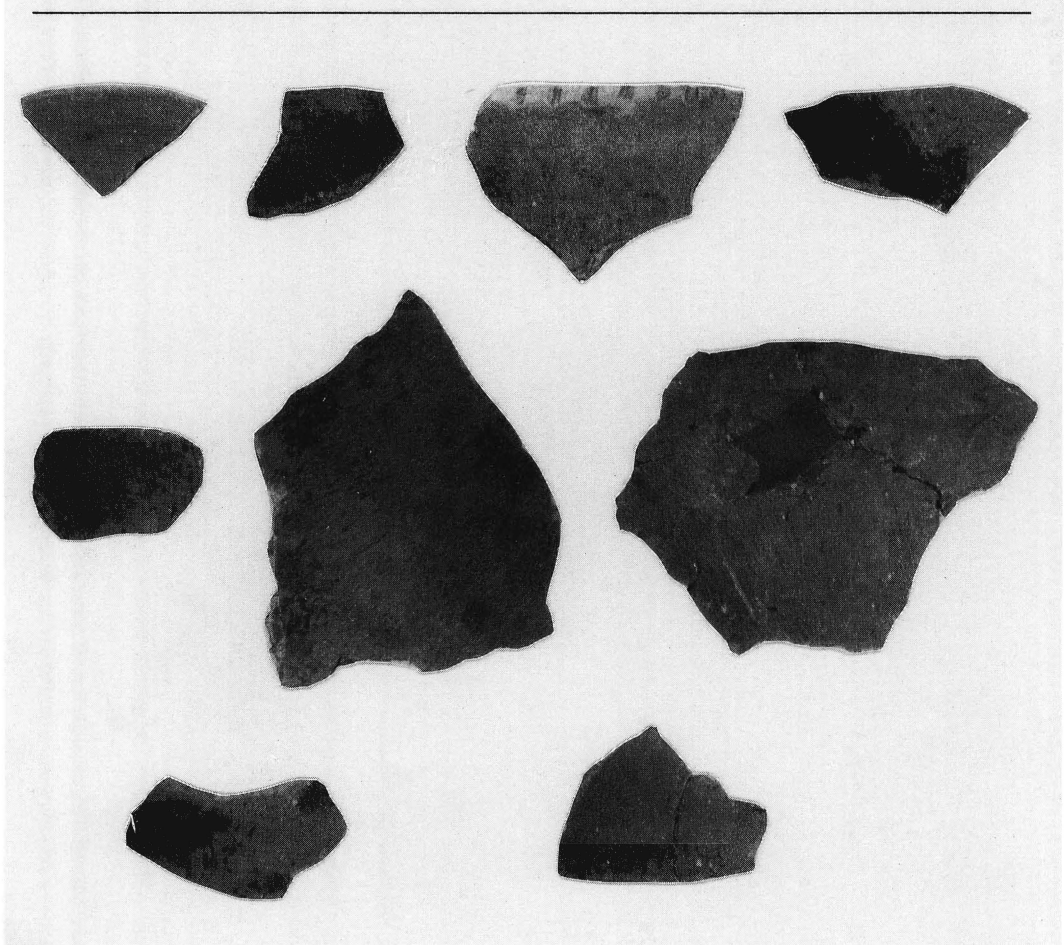
69号土坑出土遺物



71号土坑出土遺物



76号住居跡出土遺物



78号住居跡出土遺物



調査区近景



発掘風景



古墳時代 4 号住居跡



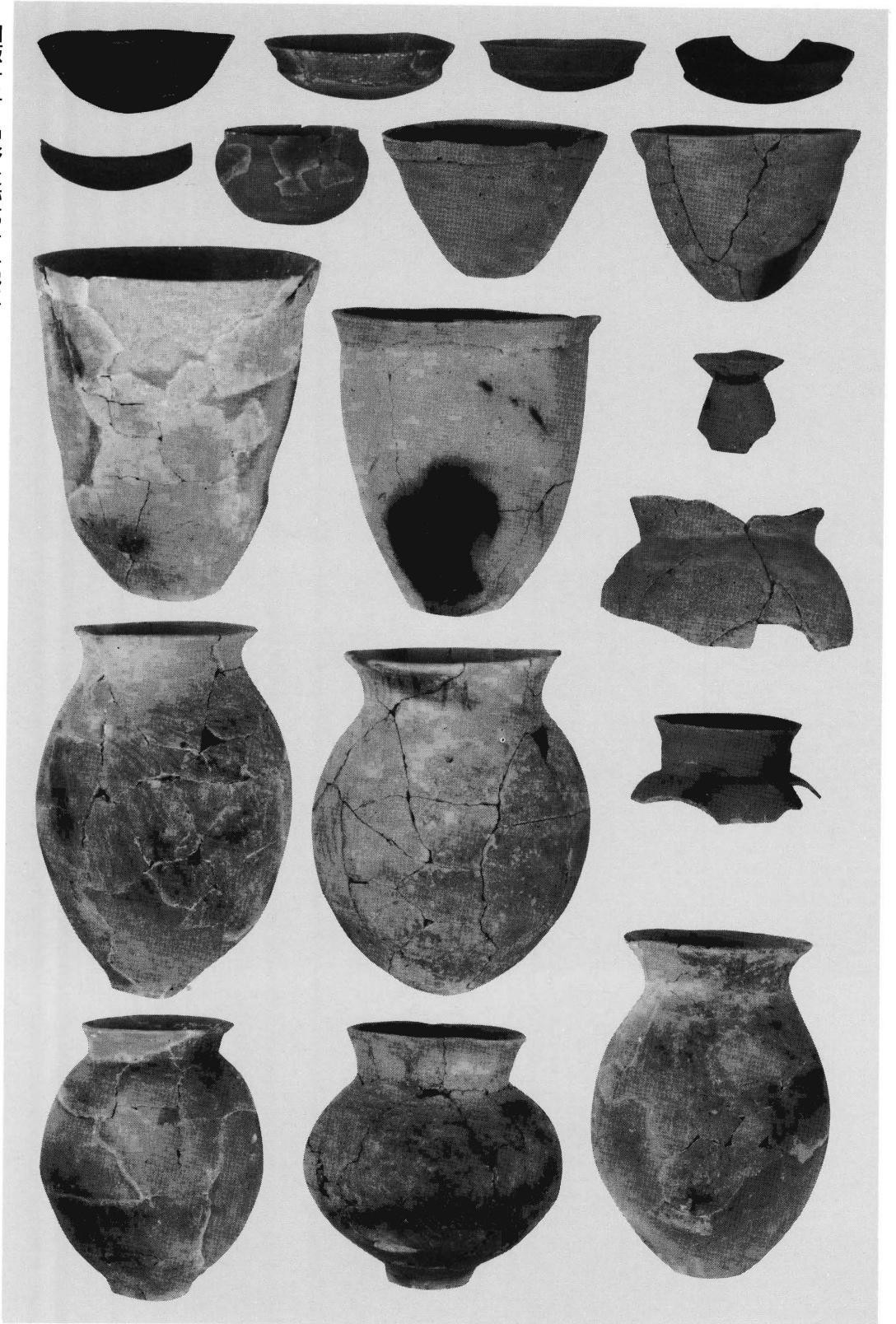
カマド遺存状態

図版一一 中野遺跡第二地点



4号住居跡遺物出土状態

図版二二 中野遺跡第二地点



4号住居跡出土遺物



調査区近景



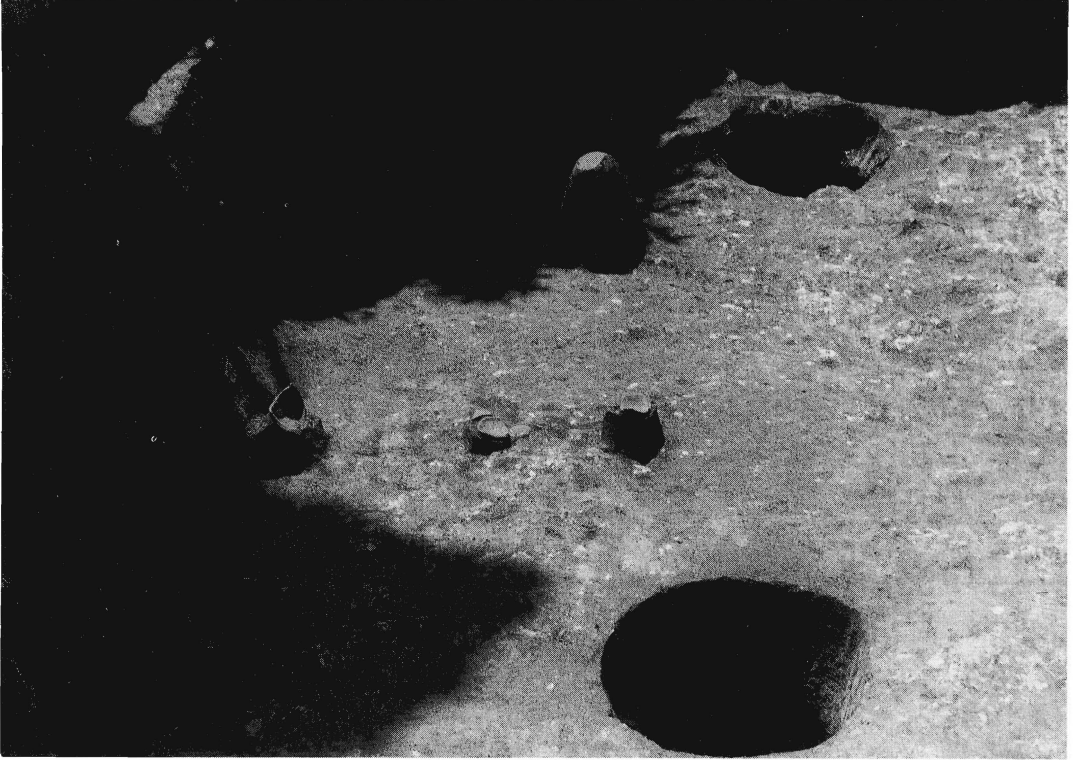
発掘風景



平安時代15号住居跡



カマド遺存状態

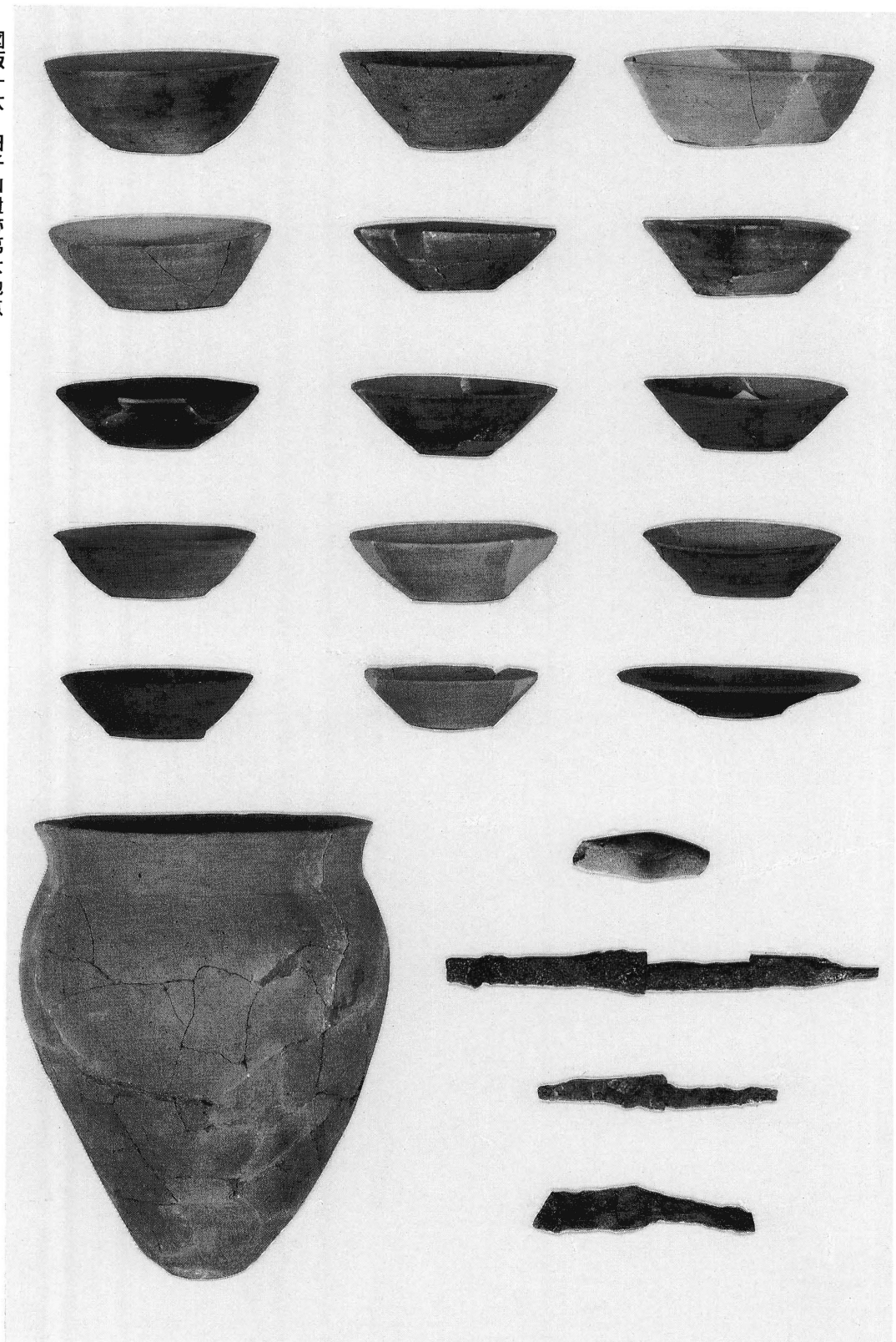


15号住居跡遺物出土状態



6号土坑

図版一六 田子山遺跡第六地点



15号住居跡出土遺物



調査区近景



試掘風景



調査区全景



平安時代16号住居跡



16号住居跡
出土遺物

志木市の文化財 第17集

志木市遺跡群 IV

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成4年3月31日

印刷 梅田印刷株式会社